

聖徒の道

8
1992



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1992年8月号



表紙——ジョン・K・カーマック長老は次のように述べている。「私たちの教会は、驚くべき速さでほとんどの国々へ広がっています。文化の違いを超え、多様性の中に一致を見いだしましょう。」(本文『文化の違いを超えて』p.26参照) イラスト——ロジャー・ラブレス。

こどものページ表紙——1年で昼の一番長い日を「げし」と言います。この日、スカンジナビア半島の国々ではお祭りをします。昔からお祭りには、子供も大人もみんなが花のかんむりをかぶります。スウェーデンのベネルスボリにある公園で木馬にまたがっているこの女の子も、花のかんむりをかぶっています。写真撮影——ペギー・ジェリンハウゼン。

一般

大管長会メッセージ——私たちの宗教のかなめ石

大管長エズラ・タフト・ベンソン 2

インドネシアの聖徒たち デビッド・ミッチェル 10

文化の違いを超えて

ジョン・K・カーマック長老 26

幸福なんてあるのかしら

バーバラ・チェイクキナー口 32

アーノルド・フリーバークが描くモルモン経の世界 34

青少年

お母さんと星 イレイン・ライザー・オルダー 22

燃える思い ラリー・A・ヒラー 44

アビジャンでのキャンプ

チャーリー・ラウンディ・アーノルド 46

定期特別記事

読者からの便り 1

家庭訪問メッセージ——

ホームメイキングを通して互いに教え導く 25

こども

モルモン経物語——アルマとニーホル 2

聖霊のたまもの シンシア・コピー・ハラ 4

分かち合いの時間——人はりん人をとうとばなければならない

バージニア・ピアス 8

おもちゃばこ 10

歌 たいせつなひとり

パトリシア・ケルジー・グラハム 11

小さなお友だちへ アンヘル・アブレア長老 12

せかいのおともだち 14

伝道と本の発表 16

聖徒の道

1992年8月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、チャールズ・ティディエ、ロバート・E・ウエルズ
編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミツチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウォーカー

チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・テイトン、ジェーン・アン・ケンブ、デニス・カービー

工程管理：ダイアナ・バンスタブレン

配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1992年8月号第36巻第8号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

普通号150円、大会号350円

International Magazine August 1992

ITEM 92988 300

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1992 by The Church of

Jesus Christ of Latter-day Saints. All

rights reserved. Translated into

Japanese 1992.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito No Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

読者からの便り

生活が変わりました

私の生活は「リアホナ」(スペイン語版)のおかげで変わりました。昨年(1991年)1年間に掲載されたいくつかの記事は、私が生活を変え、福音に対する理解を深めるのに役立ち、人々に福音のメッセージを伝えるよう私を勇気づけてくれました。

意義深いすばらしい記事をこれからも掲載してください。「リアホナ」の記事は、私の場合と同じように、人々の心を和らげ、生活を良い方向へ変えてくれるでしょう。

ペルー、アレキパ県

マヌエルブラドステキ部

オーガスト第15ワード部

マガリー・メルカド・マルティネス

もうひとつの家族

私は1991年4月号の「聖徒の道」に本当に感謝しています。特に『伴侶が教会員でなくとも教会に活発であるために』の記事に感動しました。

私はまだ結婚していませんが、家族の中で私だけが教会員なので、この記事に大変勇気づけられました。

いつか私の家族全員と、家庭の夕べのプログラムができるよう望んでいます。

私にとって教会は第2の家族です。イエス・キリストのすばらしい福音に心から感謝しています。

鹿児島地方部谷山支部

武内美香

大きな助け

私はふたりの兄弟と共に、「タンプリ」(フィリピンの英語版)を発行してくださる方々に感謝を述べたいと思います。

私は1989年から定期購読していて、毎号楽しく読ませていただいています。教会幹部からのメッセージやそのほかの多くの記事は、私にとって大きな助けになっています。イエス・キリストの福音をより深く学ぶにつれて、神との関係は強まっています。

教会員もそうでない人も、すべての人々がこのように力にあふれた機関誌を読む機会があるように願っています。フィリピン、ウルダネタステキ部
ウルダネタ第2ワード部
エデン・ティバヤン・マネージッシュ

真実の旗

「リアホナ」(ブラジル版)を発行してくださる方々のすばらしい働きに感謝しています。

私は、教会員でない友人と一緒に教会の機関誌を読むことを喜びにしています。友人も「リアホナ」を読むのを楽しみにしていて、皆さんの働きを称賛しています。内容がほかの雑誌と違うからです。

このような機関誌を発行するように教会指導者に靈感と祝福を与えてくださる天父に感謝しています。これはすべての国の人々にとって真実の旗(イザヤ13:2参照)であると思います。ブラジル、ペロオリゾンテステキ部
フロレスタワード部

アナ・クラウディア・ソーザ・オリベイラ



私たちの宗教の かなめ石

大管長
エズラ・タフト・ベンソン

現 代の私たちに与えられている最も大切な賜^{たまもの}についてお話ししたいと思います。その賜とは、産業および技術革命がもたらしたいかなる発明品よりもずっと重要なものです。これは人類にとって、現代医学に見られる多くのすばらしい進歩よりもはるかに偉大な価値があり、飛行技術の発達や宇宙旅行よりも、人類にとってずっと意義のある賜です。私がお話ししたい賜とはモルモン経のことです。

この賜は、私たちのためにそのままの形で残るようにと、主のみ手により1,000年以上にわたってつづられ、今日まで隠されてきました。この聖典については、主ご自身のみ言葉以上にその重要性を証するものではありません。

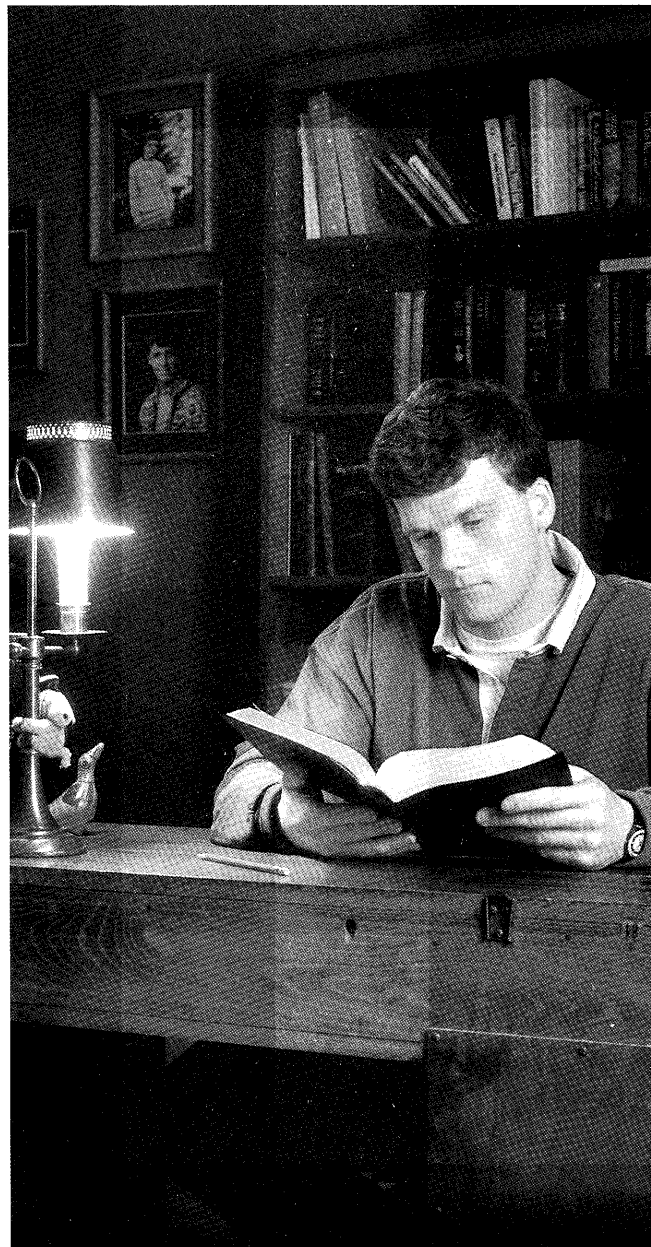
予言者ジョセフ・スミスは言った。
「人は（モルモン経）の教えに従うことにより、ほかのどの書物にも増して神に近づくことができる。」

主はご自身の言葉をもって次のことを証しておられます。(1)それが真実のものであること(教義と聖約17:6参照), (2)真理と神ご自身のみ言葉が載せられていること(教義と聖約19:26参照), (3)天からの力により翻訳されたこと(教義と聖約20:8参照), (4)イエス・キリストの完全な福音が載せられていること(教義と聖約20:9;42:12参照), (5)靈感によって与えられ、天の使いたちの導きと恵みによって確認されたこと(教義と聖約20:10参照), (6)聖典の真実性を証していること(教義と聖約20:11参照), (7)信仰をもってこれを受け入れる人は永遠の生命を受けること。(教義と聖約20:14参照)

モルモン経が大切なものであることについての第2の強力な証は、主が福音の回復の過程において、モルモン経をいつ登場させたもうたかということです。モルモン経に先立ったものは最初の示現だけでした。その驚嘆すべき示現の中で予言者ジョセフ・スミスは、神の本質と、その神が自分にひとつの業をなすように願っておられるのを知りました。それに次いで、モルモン経がこの世にもたらされたのです。

これはどういうことなのでしょう。モルモン経がもたらされたのは神権の回復の前でした。またその出版は、教会が組織される数日前のことでした。3つの光栄、日の光栄の結婚、死者のための儀式など大切な教義に関する啓示が与えられる前に、聖徒たちはモルモン経を与えられました。神権定員会や教会が設立される前にこの世にもたらされたのです。このことは、主がモルモン経をどのようにご覧になっているかを物語っているのではないのでしょうか。

モルモン経について主がどのように考えておられるのかがわかれば、それをどのように受け入れるかについて主が厳重な警告を与えておられるのも、なんら不思議なことではありません。信仰をもってモルモン経を受け入れ、正しい行ないをする者は、永遠の生命の栄冠(教義と聖約20:14参照)を受けると言われた後で、主は続け



PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

てこう警告されました。「されど信ぜずして心を頑固にし、これを受け入れざる人々はこのこと己れらが罪せらるる所以となるべし。」(教義と聖約20:15)

1829年、主は聖徒たちに「神聖なるものを軽んずることなかれ」(教義と聖約6:12)との警告をお与えになりました。確かにモルモン経は神聖なものです。しかし、その神聖なモルモン経をないがしろにしている人がいかに多いことでしょうか。言葉を換えて言えば、モルモン経を軽んじ、つまらないもののように取り扱っている人が多くいるということなのです。

1832年、初期の宣教師たちが伝道から帰ってきた時、主は彼らがモルモン経を軽んじたことを叱責されました。そのような態度であったために、彼らの心は暗くされた

モルモン経は、この時代に生きる私たちのために書かれている。モロナイはこう言っている。「見よ、私はあなたたちが今日の前にあるかのように話しているが、本当はあなたたちはまだ生れないのである。しかし、イエス・キリストが前以てあなたたちを私に見せたもうたのであなたたちの行いが今私に解るのである。」(モルモン 8 : 35)

と主は言われました。この神聖な本を軽んじたために彼ら自身への光が失われたばかりではなく、教会全体、果てはシオンの子供たちにまでのろいをもたらされたのです。主は言われました。「人々悔い改めて、新なる誓約すなわちモルモン経……を思い起〔す〕まで依然この咀いの下にあるべし。」(教義と聖約84 : 54-57)

モルモン経が出版されたのは1世紀半以上も前であるからといって、今日の私たちにとってのモルモン経の価値が下がったりするのでしょうか。私たちはモルモン経が新たなる誓約であることを心に留めているのでしょうか。聖書には旧約聖書と新約聖書があります。この「約」にあたる英語の testament という言葉はギリシャ語に由来するもので、「誓約」とも訳されています。主はモルモン経を「新たなる誓約」と呼ばれましたが、実際そのような思いがあって言われたのではないのでしょうか。モルモン経は、イエスについてのもうひとつの誓約、すなわち証となるものなのです。最近、モルモン経の標題に「イエス・キリストについてのもうひとつの証」という言葉を付け加えたのはそのためです。

初期の聖徒たちがモルモン経を軽んじたために叱責されたのなら、私たちが同じようなことをした場合も同様ののろいを受けるのではないのでしょうか。

末日聖徒はモルモン経を生涯にわたって研究する必要がありますが、それには大きく分けて3つの理由があります。

その第1は、モルモン経は私たちの宗教のかなめ石だからです。それは予言者ジョセフ・スミスの言葉にあります。ジョセフ・スミスは「モルモン経はこの地上で最も正確な書物であり、私たちの宗教のかなめ石である」(モルモン経——序文)と証しています。かなめ石とはアーチの中央に置かれる石のことです。ほかの石を支える働きをしているので、その石を取るとアーチは崩れ落ちてしまいます。

モルモン経は3つの点で私たちの宗教のかなめ石です。それはイエス・キリストの証におけるかなめ石であり、

私たちの教義のかなめ石であり、証のかなめ石です。

イエスはすべてのことのかしら石となるお方ですが、モルモン経はそのイエス・キリストに対する私たちの証のかなめ石となるものです。モルモン経は力強く、しかも明快にイエスが実在のお方であることを証しています。数多くの写本家や翻訳家、内容に手を加えたよこしまな宗教家たちの手を通してきた聖書とは異なり、モルモン経(英文)は執筆者から読者に渡るまでの間に、わずかに1度の翻訳の段階を経たにすぎません。しかも靈感によって翻訳されたのです。したがって、そこにある主の証は明快かつ純粹で、力があります。そればかりではありません。現代ではキリスト教の多くは救い主の神性を否定しています。主の奇跡的な生誕や、完璧な生涯、栄光ある復活の真実性について疑いを抱いているのです。モルモン経はそれらが真実であることについてわかりやすく、誤解のない言葉で教えています。それはまた、贖いについてもこれまでになく完全な説明を与えています。確かに、神から与えられたこの靈感あふれる書物は、イエスが救い主であることを世の人々に証する(モルモン経——とびらの言参照)うえでかなめ石となります。

モルモン経は、また復活の教義のかなめ石でもありません。前にも触れましたが、モルモン経に「イエス・キリストの完全なる福音」(教義と聖約20 : 9)が載せられていると言われたのは主ご自身でした。それはすべての教え、これまでに啓示されたすべての教義が載っているということではありません。むしろ、モルモン経には救いに必要な教義が完全な形で収められているということなのです。そして、それはわかりやすく簡潔に教えられており、子供でさえも救いと昇栄に至る道について学ぶことができるようになっていきます。モルモン経は、救いの教義に関する理解を深めてくれる事柄に満ちています。もしこの書物がなかったら、ほかの聖典で教えられていることも、それほど「誰にもわかる貴い」(I ニーフアイ13 : 29)こととして理解されなかったでしょう。

最後に、モルモン経は証のかなめ石です。かなめ石が



MORMON ABRIDGING THE PLATES, BY TOM LOVELL

モルモンは、すべてを初めから見ておられる神の靈感の下に、何世紀にも及ぶ記録を短くまとめ、最も私たちのためになる物語、話、出来事をえりすぐった。

取り除かれたらアーチが崩れ落ちるように、この教会のすべての教えはモルモン経の真実性に依存しているのです。教会の敵はそれをよく知っています。彼らがこのモルモン経の誤りを立証しようとあらゆることをするのはそのためであり、もしそれが立証できれば、予言者ジョセフ・スミスも共に倒れるからです。神権の鍵^{かぎ}や啓示、また回復された教会についての私たちの主張もそうです。しかし逆に、もしこのモルモン経が真実のものであるならば(事実、何百万人という人がこれが真実であるというみたまの証を受けたことを証しています)、人々は回復やそれに伴うすべての主張を受け入れなければならないのです。

そうです。モルモン経は私たちの宗教のかなめ石です。私たちの証のかなめ石であり、教義のかなめ石であり、主なる救い主の証におけるかなめ石なのです。

さて、モルモン経を私たちの学びの中心としなければならぬ第2の理由は、このモルモン経がこの時代に生きる私たちのために書かれたものだからです。ニーファイ人たちにも、古代のレーマン人たちにもモルモン経はありませんでした。まさに私たちのためのものなのです。モルモンはニーファイ人の文明の末期にこれを書き記しました。モルモンは、すべてを初めから見ておられる神の靈感の下に、何世紀にも及ぶ記録を短くまとめ、最も私たちのためになる物語、話、出来事をえりすぐったのです。

モルモン経の執筆者たちは口をそろえて、それが後世の人々のためであることを証しています。「主なる神は私が今ここに記すことを、子々孫々に保存して代々相伝えることを私に約束したもうた」(IIニーファイ25:21)とニーファイは言っていますし、彼の跡を継いだ弟ヤコブも次のような類似した言葉を残しています。「ニーファイは、ニーファイの民の歴史はニーファイのほかの版に刻まなくてはならぬ、私はこの小さい版を保存して代々私の子孫に伝えよと言〔った。〕」(ヤコブ1:3)イノスとジェロムも同様に、自分たちの世代の人々のため

ではなく、後の世代の人々のために書いたと述べています。(イノス1:15-16; ジェロム1:2 参照)

モルモンも自らの言葉で「イスラエルの家の残りの者よ、よく言うておく」(モルモン7:1)と述べています。そして靈感を受けた最後の執筆者であるモロナイは、実際に私たちの時代を見て次のように言いました。「この記録が汝らの中に現われてから間もなく起るはずの出来事について主は前^{もつ}以て大きな驚嘆すべきことを私に教えたもうた。

見よ、私はあなたたちが今日の前にあるかのように話しているが、本当はあなたたちはまだ生れないのである。しかし、イエス・キリストが前^{もつ}以てあなたたちを私に見せたもうたのであなたたちの行いが今私に解^{わか}るのである。」(モルモン8:34-35)

彼らが私たちの時代を見、私たちのためになることを選んでくれたとしたならば、なおさらモルモン経を学ぶ必要があるのではないのでしょうか。「この事柄を記録に残すようモルモン(モロナイあるいはアルマ)に主が靈感を与えられたのはなぜだろうか」、「このことから現代の生活への教訓として何を学べるのだろうか」と絶えず自問する必要があります。

そして、その質問に対する答えの例は数限りなくあります。たとえば、モルモン経には主の再臨に備える方法が書かれています。キリストがアメリカ大陸に来られる前の数十年間のことを記した重要な箇所がありますが、その時代について慎重に学ぶならば、なぜ主の降臨に先立つ恐ろしい裁きに際して滅ぼされた人がいたのか、またその一方で、バウンテフルの地にある神殿で主の手足の傷に触れることができた人がいたのはなぜか、などについての答えが得られます。

モルモン経を読めば、キリストの弟子たちが戦争の時代をどのように生きたかもわかります。背筋が寒くなるような生々しい描写を通して、秘密結社の悪事についても学べます。迫害や背教に対処するうえで教訓を見いだし、伝道をどう進めたらよいかについても多くを学べま

モルモン経に記された主の証は明快かつ純粋で、力がある。……確かに、神から与えられたこの靈感あふれる書物は、イエスが救い主であることを世の人々に証するうえでかなめ石となる。

す。そしてモルモン経は、物質主義やこの世のものに心を奪われることの危険性をほかのどの書物よりもよく教えてくれています。この書物が私たちにに向けて書かれたものであり、そしてこの本の中に偉大な力と慰め、守りがあるのを、だれが否定できるでしょうか。

モルモン経が末日聖徒にとって価値あるものである第3の理由は、先ほど引用した予言者ジョセフ・スミスの言葉にあります。彼は言いました。「私は兄弟たちに言った。モルモン経はこの地上で最も正確な書物であり、私たちの宗教のかなめ石である。人はその教えに従うことにより、ほかのどの書物にも増して神に近づくことができる。」(モルモン経——序文)これがモルモン経を学ぶ第3の理由です。つまり、私たちが神に近づけてくれるものだからです。私たちに、神に近づきたい、日々の行ないの中で神のようにになりたい、絶えず神の存在を感じたいと願う気持ちがどこか心の奥深くにあるのではないのでしょうか。そうだとするならば、モルモン経はほかのどの書物よりもその助けとなるものです。

モルモン経は確かに真理を教えています、それだけではありません。モルモン経は確かにキリストの証をしていますが、それだけでもありません。それ以上のものがあるのです。モルモン経には力があって、真剣に読み始めるや否やその力は読む者の人生に流れ込み、誘惑に打ち勝つ力となります。またそれは欺きを避ける力となり、まっすぐで狭い道にとどまる力となります。聖典は「^{いのち}生命の言」(教義と聖約84:85)と呼ばれていますが、モルモン経ほどその言葉にふさわしいものはありません。神のみ言葉に飢え渇く者はモルモン経を通して豊かに得られるようになるのです。

皆さんに個人として、また教会全体として、このモルモン経の重要性についてぜひとも真剣に考えていただきたいと思います。

主が私たちに授けてくださったこの偉大で、かつすばらしい賜を軽く取り扱うことによって、罰や裁きを受けてのろいの下に置かれることのないようにしましょう。

(教義と聖約84:54—58参照)むしろ、心にその言葉を蓄えることによってもらされる約束を勝ち得ようではありませんか。

老若を問わず世界中の聖徒の方々から、モルモン経を読んで研究するというチャレンジを受け入れてくださった旨の手紙を数多くいただきました。

そうした決意によってどれほど生き方が変わったか、どれほど神に近づけたかなどについて知ることができ、大変うれしく思います。そのようなすばらしい証は、モルモン経は「私たちの宗教のかなめ石」であり「人はその教えに従うことにより、ほかのどの書物にも増して神に近づくことができる」という予言者ジョセフ・スミスの言葉に一層の確信を与えてくれているのです。

モルモン経が私たちの生活のかなめ石になりますようお祈りいたします。□

(1986年10月の総大会説教より)

ホームティーチャーへの提案

1. モルモン経は、この時代の人々に与えられた賜である。主の指示の下で、私たちのためにつづられた。

2. 主はモルモン経の真実性について、何度も繰り返し証を述べておられる。にもかかわらず、この書物を頻繁に読んだり、その教えを実践したりせず、モルモン経を軽んじている人々がいる。

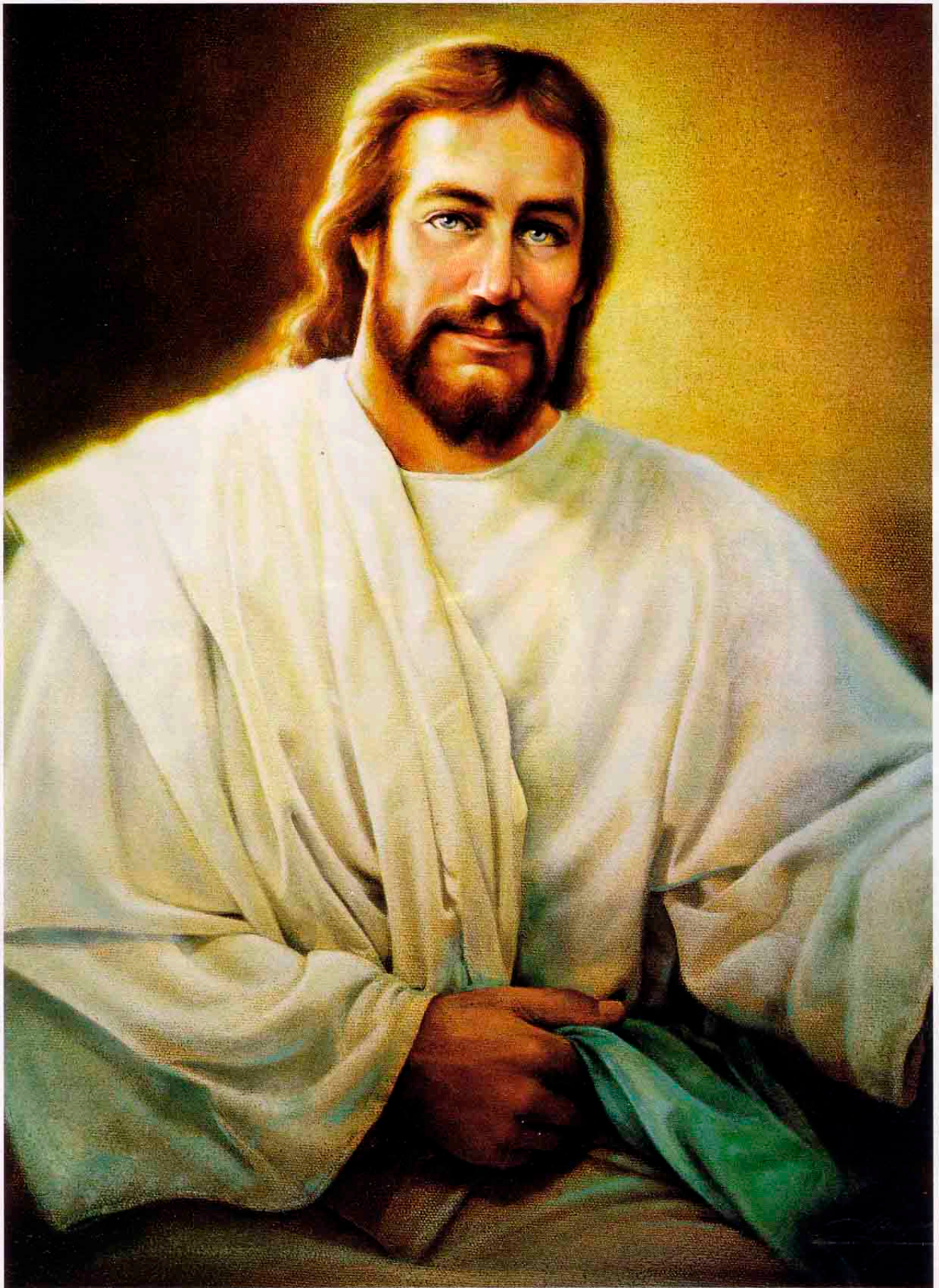
3. 私たちは、以下のような理由でモルモン経を生涯にわたって研究する必要がある。

●モルモン経は、イエス・キリストに対する証、および私たちの証の、かなめ石である。

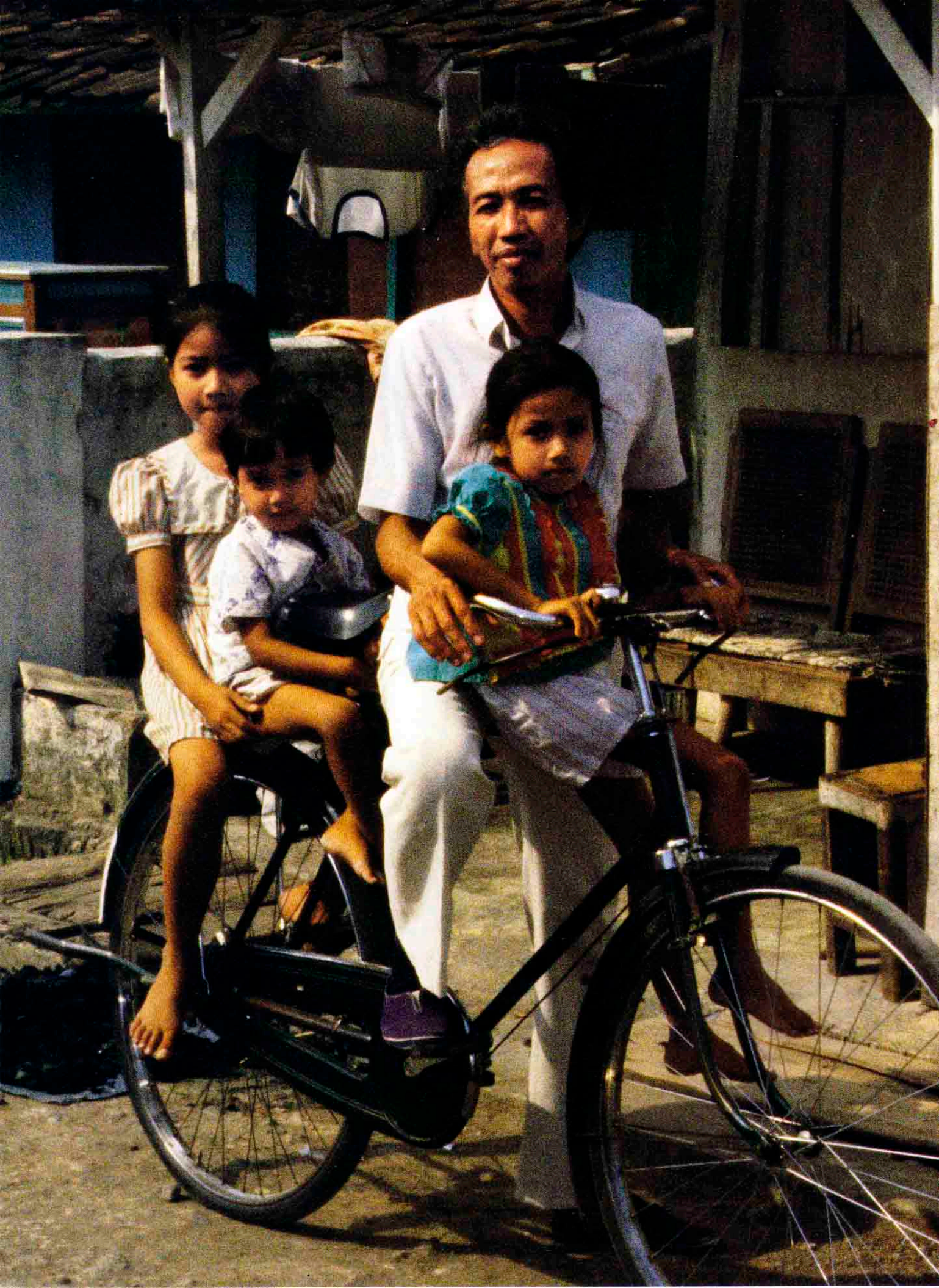
●モルモン経は、この時代に生きる私たちのために書かれている。

●モルモン経は、私たちが神に近づけてくれる。

●モルモン経は、真剣に読み始めるや否や読む者の人生に流れ込む力を持っている。



PAINTING BY GREG OLSEN



インドネシアの 聖徒たち

デビッド・ミッチェル

日 曜の朝 9 時 45 分です。インドネシアの首都ジャカルタから南東へ 585 キロのここソロの町では、スワルノ兄弟が自転車で出かけるところです。7 人の子供のうち 3 人が彼の自転車に乗り、もう 1 台の自転車には長男のアンディと残りの 3 人の子供たちが乗ります。日曜学校へ行くのです。福音の教義クラスを教え終わると、スワルノ兄弟は神権会を 10 分くらいで抜け出し、聖餐会せいさんに間に合うように自転車で妻を迎えに行きます。

西へ約 600 キロ離れたバンドンでは、ダパランガ夫妻と 4 人の子供たちが、小さなタクシーに乗って教会に出かけます。ダパランガ兄弟はバンドン支部の支部長を務めています。

ジャカルタではヘルミン姉妹が幼い息子をふたり連れてバスで教会へ通います。長男は自転車で近道を通り、先に教会に着いています。

人口 1 億 8,700 万人のこの国で末日聖徒はわずか 4,000 人にすぎません。ここに紹介した 3 家族は皆改宗者で、

インドネシアでは典型的な末日聖徒の家族です。

アジア大陸とオーストラリアの間にちりばめられた 1 万 3,000 の島々から成るここインドネシアでは、教会は比較的新しい存在です。ジャワ本島は世界有数の人口密集地域であり、3 つの地方部と 17 の支部を有しています。

小さな始まり

ジャカルタに初めて支部が組織されたのは 1970 年 2 月のことでした。その 1 カ月前に、イスラム教徒が大多数を占めるこの国に、シンガポール伝道部から宣教師が派遣されて来ました。1970 年 8 月には、教会は正式に認可を受けることができました。その後数年の間に会員は増え、支部の数も増えていきました。インドネシア語のモルモン経が出版されて、地元からインドネシア人の宣教師も召されるようになりました。それから伝道活動は困難に直面しました。政府は伝道活動に規制を

3 人の子供を自転車に乗せてソロの教会に向かう仕度をするスワルノ兄弟。もう 1 台の自転車には長男がほかの 3 人を乗せて出かける。



余暇にバイオリンの演奏を楽しむピート・シェン・タンディマン副伝道部長。インドネシアの伝道活動は彼が管轄している。タンディマン夫妻は改宗後4人の息子を宣教師として送り出した。

加え、1981年1月には伝道活動を中止せざるを得なくなりました。しかし、その後もインドネシア人の宣教師は静かに活動を続け、1985年には、インドネシア人のエフィアン・カダルスマン兄弟の下で新しく伝道部が組織されました。1988年7月には新しい伝道部事務所が奉獻されましたが、1988年11月以来現在に至るまで、外国人宣教師の入国は禁止されたままです。

1989年7月、インドネシア伝道部は再び閉鎖され、この地における伝道活動は現在もシンガポール伝道部の管轄下にあります。今はシンガポール伝道部の副伝道部長でジャカルタ在住のピート・シェン・タンディマン兄弟の監督の下に、約60人の地元の宣教師が召され、福音を宣べ伝えています。

タンディマン副伝道部長は政府の仕事で退職して法律事務所で働いていました。そして1970年、教会の政府認可申請のために訪れた末日聖徒の弁護士たちに出会ったのです。弁護士たちの招きに応じて、彼は宣教師から福音を学び始めました。宣教師たちの言動と彼らの教え、そして会員たちのフェロシップに感銘を受けたと言います。「本当に強い印象を受けました。その感銘が支えとなって、私はバプテスマを受けてから数年間の大切な時期を活発に乗り切ることができたのです。」

タンディマン兄弟の妻と6人の子供たちも福音を受け入れ、彼自身がバプテスマを施しました。娘は結婚し、今ではひとりの娘の母親となっています。4人の息子はインドネシアで伝道を立派に終え、5番目の息子は宣教師として召される日を楽しみにしています。

バプテスマを受けて1年後、タンディマン兄弟はジャカルタ支部の支部長として召され、後に西ジャワ地方部長として働きました。

すべての人に福音の祝福を

タンディマン副伝道部長は伝道活動を管理する立場から、宣教師と会員がインドネシア社会のあらゆる階層の人々にもっと働きかける必要を感じています。「会員のほとんどは低所得者層の人々です。もっと会員の層を広げることによって、教会の基盤を強める必要があります。」

教会の成長段階にある地域はどこも同じですが、インドネシアでもフェロシップと新会員の定着にはさらに努力が必要です。「ときには教会の集会に出かけること自体がチャレンジになります。会員の多くは教会堂から遠い所に住んでいて、低所得の大家族にとっては、交通費もばかにならないのです。しかし、教会に行きたいと本当に



ソロのツキミン家族はこの屋台店で「バックソー」(肉団子)を売って生計を立てている。ふたりの宣教師も常客でよく立ち寄っていた。ある日、ツキミン兄弟が彼らの仕事を尋ねたことが家族でバプテスマを受けるきっかけとなった。現在、ツキミン兄弟は日曜学校副会長の召しを果たしている。左からサルワノ、スポノ、サリヤティ(いすにかけている)、サリヤニ、ツキミン夫妻。写真のほかにもサルソノとトリヨノのふたりの子供がいる。

ジャカルタ・セラタン支部のヘルミン姉妹は3人の息子を抱える未亡人で、教会に活発に集い、聖典を読んで賛美歌を歌うことに大きな助けを感じている。



トーマス・スウォンドはソロに新しく「偽りの」教会ができたと聞いて、好奇心から集会に出席した。妻と共に宣教師から福音を学び、ふたりは1978年にバプテスマを受けた。現在、家族でバンジャルサリ支部に集っている。スウォンド兄弟は仕立て屋だが、数学やその他の学科の家庭教師もしている。この写真を撮影した時、兄弟は家庭教師の仕事で不在だった。左からふたりめがスウォンド姉妹。左に立っているのはおいのスハルノで、ほかは7人いるスウォンド家の子供のうちの5人。

望むなら、必ずその道が備えられていると思います。これは信仰の試しなのです」とタンディマン副伝道部長は語ります。

助けと力

インドネシアの聖徒たちの生活には、イエス・キリストへの信仰と良い行ないが灯台の光のように輝いています。ソロのスワルノ兄弟はバプテスマの後に、7歳の娘を事故で失うという悲劇に見舞われました。1977年の12月、改宗して2週間後のことでした。

「そのころ私は仕立て屋をしていました。いつも忙しくて家族とあまり時間を過ごせない毎日でした。事故の日、私は客に頼まれた仕事に忙しく、娘に注意を払っていなかったのです。どうしたか娘はテーブルの上に置いてあった小さな灯油のこんろをひっくり返しました。こぼれた油に引火し、炎が娘の髪に、そして服に燃え移りました。両手にやけどを負いながら、私は気が狂ったように服を脱がせようとしたが、娘は入院して8日で亡くなりました。

宣教師や支部の会員たちが病院や家に来て、助けを申し出てくださいました。会員のひとは毎晩病院で何時間も私のそばにいてくれました。その兄弟や

ほかの会員のしてくれたことを忘れたことはありません。そんな彼らの助けと力によって、会員になってすぐの時期を乗り切れたのです。

会員たちのフェローシップと心からの思いやりのおかげで、妻も教会に入る決心をするに至り、1979年にバプテスマを受けました。子供たちは8歳になるに従って順にバプテスマを受けています。

教会に入った当時、私は自分と家族の生活をどうしたら改善できるか思い巡らしていました。そのうち宣教師の英会話クラスに通い始め、後に国の検定試験に合格することができました。今では観光ガイドとして働き、前より高い収入を得ています。」

スワルノ兄弟によれば、イスラム社会で末日聖徒が生きていくのは、ときにむずかしいこともあると言います。「息子が15歳くらいの時、学校の先生で厳しい人がいて、教会の教えに従うなど言ったそうです。しかし息子は信念を曲げませんでした。家族にはいつも『何が起ころうと、自分が何者かを考え、教会の標準を守ることを忘れないように』と話しています。」

標準を守る

標準を保つための助けとして、スワ





インドネシアで召された最初の地元出身の姉妹宣教師のひとり、エンダン・プリハティニ姉妹(左から2番目)は現在ソロでセミナーやインスティテュートのクラスを教えている。

ルノ家のふたりの子供たちは早朝セミナーに出席しています。セミナー教師のエンダン・プリハティニ姉妹は35歳。スワルノ家が娘を亡くした時に駆けつけてくれた宣教師のひとりです。プリハティニ姉妹は末日聖徒の友人を介して教会を知りました。彼女はこう語ります。「教会について何か資料があるかと尋ねたら、救いの計画を解説したパンフレットを手渡されました。私はとても興味をそそられ、友人に教会に入れるか尋ねました。彼らはそれを聞いてとても喜んで、教会について知りたいなら宣教師にお宅へ伺わせましょうと言ってくれました。私はまず父の許しをもらい、宣教師に福音を教えてもらいました。

父と兄弟たちもレッスンを受けました。私は1974年の3月にバプテスマを受け、1カ月後に父が、そしてさらに1カ月後にはふたりの兄弟がバプテスマを受けました。後に母も、そしてほかの弟や妹たちも8歳を迎えるのを待ってバプテスマを受けました。9人の子供のうち、今まで5人がインドネシアでの伝道を終えています。

私はインドネシア人としては最初の姉妹宣教師のひとりです。18カ月間福祉宣教師として召しを果たしました。同僚のひとりにはメアリー・エレン・エドマンズ姉妹でした。彼女は現在、ユ

タ州プロボの宣教師訓練センターの訓練担当副部長をしています。彼女は毎朝英語を教えてくださいました。『これは壁です』とか『ペンを落とさない』『拾いなさい』とか言いながら教えてくださいましたのです。』

プリハティニ姉妹は現在、教会教育部の職員として、4つの支部にまたがる3つのセミナーで計45人の生徒を教えています。そのほか、彼女は若い夫婦や帰還宣教師、大学生を対象にインスティテュートのクラスも教えており、地方部シングルアダルト代表でもあります。

教会の多くの若い女性と同様、プリハティニ姉妹も独身というチャレンジに直面してきました。「今ではもうチャレンジと感じていません」と彼女は言います。「数年前、30歳くらいの時でしたが、私は結婚できないことを悲しく思っていました。ある日祈りの中で天父に思いを訴えました。『主よ、私はなすべきことはすべて行なっています。なぜ私は良い神権者と結婚する機会に恵まれないのですか。』心の奥深く主の声を聞いたと感じました。主はこのように言われたのです。『エンダン、あなたはたくさんの祝福を受けている。感謝しなさい。』主はその時、私の受けた恵みの数々、特に福音の知識という恵みを思い出させてくださっ



1990年5月以来ジャカルタ地方部の地方部長として召されているトエゴノ・ウィルジョディハルジョ兄弟は、1973年に妻と4人の子供、おいと共にバプテスマを受けた。彼は地方部の会員に教会の教えに忠実であるように繰り返し勧めている。「家庭でも、教会でも、そして社会でも、幸福はイエス・キリストへの信仰と忠実さによってのみ得られるものです。私たちは忠実で福音の生きた模範になることで、世の光になれるように努めなければなりません。」

たのです。

その経験に加えて、祝福師の祝福に慰められました。祝福文によれば私は神殿で結婚する男性に出会おうと約束されています。いつも主に近くいればきっとその機会に恵まれると信じています。ですから、私はもう独身であることを心配していないのです。

教会の標準に従って生きれば主はいつも見守ってくださると知っています。」

困難を喜ぶ

3人の息子をひとりで育ててきたジャカルタ・セラタン支部のヘルミン姉妹は、教会の標準を守ることを毎日の目標にしています。プロテスタント教会の不活発会員だった彼女は、末日聖徒の親戚から福音のメッセージを聞いてみる気があるか尋ねられました。

「彼女が尋ねてくれた時、10年前の私が20歳だった当時のことを思い出しました。私は母にイエス・キリストの福音をどこで勉強できるか聞いたことがありました。その時母は私に、辛抱強く待てばひとりかふたりの人が家に来て福音を教えてくれる日が必ず来る、と言ったのです。

宣教師と初めて会ってから3カ月後の1985年12月、私はバプテスマを受け

て会員になりました。結婚していた私にはミンドという息子がひとりいました。夫と息子も後にバプテスマを受けました。」

しばらくして次男のナンドが生まれ、8歳でバプテスマを受けました。次に生まれた娘は1歳で亡くなりました。

ヘルミン姉妹の夫はアルコールにおぼれて家計を支えることができなくなり、教会から離れていきました。ヘルミン姉妹は道端でスイカを売って生計を立てるようになり、今もそれを続けています。夫は1989年、ちょうど姉妹が三男のマーチンを妊娠している時に亡くなりました。

ヘルミン姉妹と3人の息子が住む小屋は、繁華街の外れにあり、今にも崩れ落ちそうな2軒の店にはさまれています。近くにある自分の家は人に貸して、生活費の足しにしているのです。

小屋をできるだけ住み心地よくし、外の喧嘩から家族を守るのは容易ではありません。一度小屋の一部が壊れたことがありましたが、支部長の助けで修理ができました。

「支部の会員たちは、私が助けを必要としているときはいつも手を差し伸べてくれます。でも一番大きな助けは教会に活発に集うことで得ています。レッスンはすばらしいし、息子たちが霊的な教育を受けられることに心から

感謝しています。息子たちはつらい経験もしてきましたが、教会のおかげで素直でいてくれます。我が家では家庭の夕べは週一度だけではありません。ほとんど毎晩のように一緒に聖典を読み、歌を歌います。

悲しいときや悩みがあるとき、聖典を読み賛美歌を歌えば重荷は軽くされ、心が晴れることを経験から知っています。」

「神は私を愛してくださいます」

バンドンに住むヨハネス・ダパランが支部長夫妻とその家族も、福音と福音のもたらす幸福を味わっています。

ダパランが兄弟は父親がプロテスタントの牧師で、祖父は故郷スンバ島で最初の現地人牧師という、キリスト教の家庭に生まれました。しかし彼は、家族の宗教的な教えと「自分の内なる感情や良心」には、相いれないものがあると感じていました。「結局、私は反抗的な子供と見なされるようになりました。いつも教えに逆らっていたからです。キリスト教とイスラム教の両方の大学で学びましたが、宗教に関してはいづれにも満足できませんでした。」

何年かが過ぎ、ダパランが兄弟は結婚してバンドンに住んでいました。あ

る日彼は町でふたりの末日聖徒の宣教師を見かけました。

「彼らの外観、特に名札をつけてクリスチャンであると公言していることに好感を持ちました。私の知っているクリスチャンはほとんど、信仰を公にするのに消極的だったからです。」

宣教師たちにいくつか質問してから彼らを家に招きました。それから2、3週間、宣教師たちはダパランガ夫妻と家庭集会を持ちました。

「彼らの教えの中には、私たちには初めてのものもありました。たとえば、救い主がアメリカ大陸に現われたことは初めて聞きましたし、救いの計画もそうでした。彼らが誤った教義を教えていると考えて、宣教師たちを避けた時期もありました。しかし、彼らはあきらめませんでした。私が帰るのを数時間も待っていたこともあります。」

結局私は、宣教師の話全部聞いてから、真実かどうか判断しようと決心しました。モルモン経をもらい、1週間ほとんどの時間をモルモン経を読むのに費やし、内容についてあれこれ考えながら過ごしました。

読み始めると、真実でないと言っている力を感じました。その力に逆らって、モルモン経を読み終えることができるようにと祈りました。

かなりの期間私はたびたび祈って、

モルモン経が真実か、そして宣教師たちは主の僕^{しもべ}なのかどうか尋ね求めました。

するとある夜眠っていると、主がもはやためらってはならないと言われるのを心に感じました。主はモルモン経が真実であり、宣教師はまことに主の僕であると言われました。それまで私と家族はふさわしくないと感じて教会には出席していなかったのですが、今や主は私に、妻と家族を教会に連れて行くように命じられました。

私にとって本当に霊的な瞬間でした。主の私への愛を感じたあの時を思い出すと、今でも泣きたくなります。何の取り柄もなく、将来を嘱望されているわけでもない私のような人間を、主は心にかけてくださると感じたのです。今では、主は私と家族をいつも祝福してくださったと断言できます。主はいつも私たちを見守っておられます。すべての人を見守っておられるのです。

私は妻を起こしてその出来事を話しました。妻も私と同様、祈りがこたえられたと感じました。」

その時からダパランガ家族は福音の教義をよく学び、集会にも出席し始めました。しかし、1984年のバプテスマまで6カ月待たなければなりません。「結婚証明書をなくしてしまい、宣教師が1973年に私たちが結婚したことを証明できないまま、バプテスマを



スバンドリヨ兄弟はソロで生まれ育ち、学業修了後ジャカルタに移り住んだ。1977年、19歳でバプテスマを受けた。インドネシアでの伝道の後、ある会社に就職し、後に伝道を終えて帰って来たステフィという若い姉妹に、同じ会社の仕事を紹介することになった。ふたりは1985年7月に結婚。スバンドリヨ兄弟は現在、ジャカルタで教会の施設管理部部長およびオフィスコーディネーターとして働いている。兄弟はジャカルタ地方部の副地方部長として、姉妹は支部の初等協会会長として召されている。左からエズラを抱くステフィ姉妹、ジェレディタ、マホンライ、スバンドリヨ兄弟。

妻と子供たちに囲まれたヨハネス・ダ
パランガ支部長。クリスチャンの家庭
に生まれたダパランガ兄弟は末日聖徒
の宣教師たちに会うまで、既成の宗教
に満足できなかったと言う。

施すことはできないと言ったためです。
ようやく役所で写しをもらってバプテ
スマを受けることができました。」

スンバ島のダパランガ支部長の家族
は、キリスト教の他教派とかかわりが
あることを喜んでいます。「父は私の
家に来て、いろいろ質問しました。最
後に彼は教会は正しいと思うが、自分
の教会と会衆から離れるにしのびない
と言いました。モルモン経を持って帰
り、自分の教会の青少年を教えるとき
にそれを使っています。父の紹介で男
の子が何人か私たちの家に滞在した
ことがあります。父はその子たちに福音
を教えてほしかったのです。そのうち
数人はバプテスマを受けました。」

福音を受け入れて以来、ダパランガ
家族はバンドン支部で活発に集ってき
ました。バプテスマ後1年もたたない
うちに、ダパランガ兄弟は第二副支部
長に召され、1987年には支部長に召さ
れました。ティニ・ダパランガ姉妹は
扶助協会に活発に集い、ある時は会長
として、またある時は副会長として責
任を果たしました。

ダパランガ夫妻は様々な責任を通し
て、試練に遭遇する支部の会員たちを
助ける機会をたびたび与えられました。
「しかし、祈りと主のみ業に励みたい
という望みによって乗り越えられない
試練はないのです。」この点でふたり

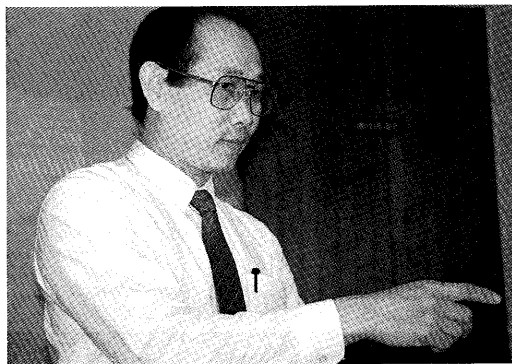
の意見は一致しています。

ダパランガ支部長の霊的な助言と聖
典の知識という祝福を受けているのは、
支部の会員たちだけではありません。
彼は、薬を商う彼の屋台店へ来る客に、
この薬は確かに役に立つが、主と主の
道こそ何にも勝る「薬」なのだ、と言
って聞かせています。

彼は薬のほかに蛇も売っています。
生きた蛇です。「ジャワ島中部の蛇捕
獲業者や農民から蛇を仕入れています。
コブラの生息地として有名な地域です。
インドネシア人は蛇の肉を好んで食べ、
皮も使います。蛇の油は鎮痛用の軟膏
として喜ばれます。」

蛇を扱いはするものの、家族はだれ
も毒を持つきばには決して触れません。
同様に「私たち家族は福音を実践し、霊
的な力を強めることによって、世の罪
に近づかないよう努力しているのです」
とダパランガ支部長は話しています。

「私たちは全霊を傾けて主を信じな
ければなりません。自分自身の理解力
に頼ることは避けるべきです。主と主
の教えのすべてを受け入れるなら、主
は進むべき道に私たちを導いてくださ
います。この教会が啓示によって導か
れていることを個人的経験から知って
います。また、私たち自身の生活にも
啓示の助けをいただくことができると
証します。」□



1970年、ハンスキン・イシャル兄弟
はバンドンでの最初の改宗者としてバ
プテスマを受けた。専任宣教師が支部
長会を兼任していた当時のことである。
教会の教えが「くだらない」という家
族や友人の言葉に、イシャル兄弟は
かえってバプテスマを受けたいとい
う内からの強い衝動を感じた。バプテ
スマ後、数カ月のうちに支部書記、M
I A会長、日曜学校教師に次々と召され、
同時に3つの責任を果たしていたこと
もあった。イシャル兄弟の仕事は建
築設計士、翻訳者、イラストレーター、
著述家と、多岐にわたる。



お母さんと星

イレイン・ライザー・オルダー

アイダホ州ポカテロ市に住むジェレド・アンダーソンは、1988年までごく普通の生活を送っていました。アメリカの10歳の少年がよくするように新聞配達や家の周りの雑用をし、友達と一緒にバスケットボールや野球をしたり、自転車に乗ったりするのが好きでした。しかしその年、ジェレドの生活に大きな変化が訪れました。突然、自分の母親の世話をしなければならなくなりました。

ジェレドは、13歳になった今でも、1988年4月のある日曜日に、母親が脳溢血^{のういつけつ}で倒れたという知らせを受けた時の衝激を覚えています。病院から連絡があったその日、ジェレドは祖母の家に行っていました。その週に、何度も検査や手術が行なわれて、ジェレドの母親マーシャ・アンダーソンには脳に2種類の腫瘍^{しゅよう}のあることがわかりました。医師たちの診断では3カ月の命ということでした。

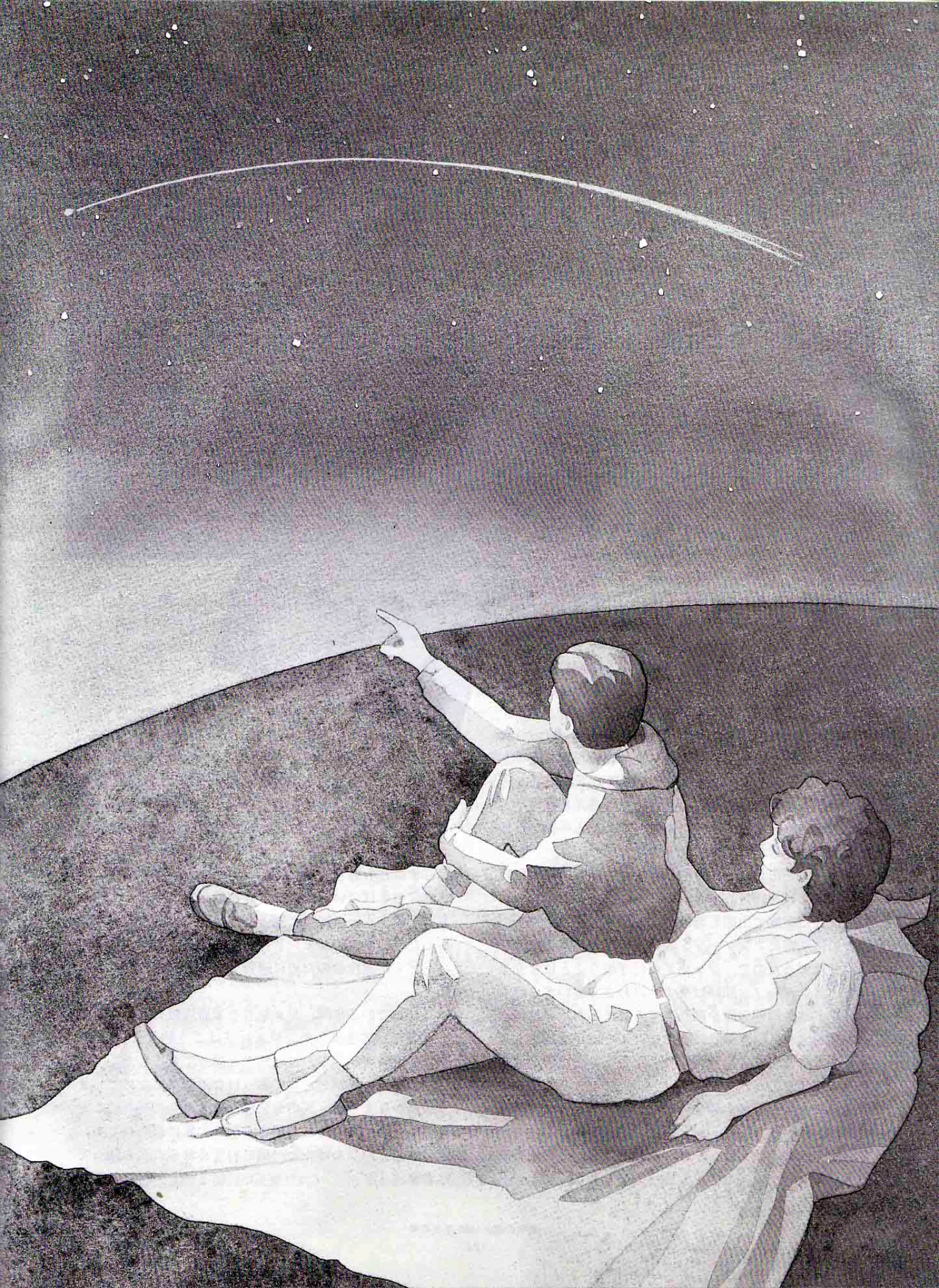
「とても怖かったです。」当時を思い出してジェレドはこう語ります。「お母さんが死にそうだと聞いてとっても恐ろしかったです。お母さんはぼくの一番の親友だし、ぼくが必要とするときはいつもそばにいてくれたんです。」

母親が自分を必要としている今、今度は自分がいつもそばにいてあげようとジェレドは努力しています。彼はニール・アンダーソンと妻マーシャの末っ子で、ほとんどの時間は家で母親の世話をしています。長女のトリーナは結婚していますし、長男のシェーンはバージニア州ロアノークで伝道中です。次女のキムは高校3年生です。

アンダーソン姉妹は手術後、すべてのことを学び直さなければなりません。歩くこと、話すこと、読むこと、書くこと、そして服を着ることも。運動療法も頻繁に受けていますが、母親を助けるためにジェレドもそれを覚えました。今でも発作の起こることがあるので、ジェレドは看護婦から、母親が倒れたときけがをしないように抱き止める方法も教えてもらいました。

「ジェレドには第六感のようなものが働くんです。」母親のマーシャ姉妹はこう言います。「そしていつも私が必要とするときにそばに来てくれるんです。」でもジェレドは、母親を愛している男の子ならだれでもすることだと言っています。

ジェレドと家族は、医師の診断よりも長く生き永らえている母親を励まし続けています。ジェレドは母親がベッドから起き、車いすに乗り、そして歩けるように助けました。その間中、彼はいつも天父に助けを求めて祈りました。「お母さんが発作を起こしているときでも、ぼくは手を



止めて祈ります。でもみどころが行なわれるように祈ることも忘れないようにしています。」ジェレドはさらにこう付け加えてくれました。「忍耐についてたくさん学びました。」

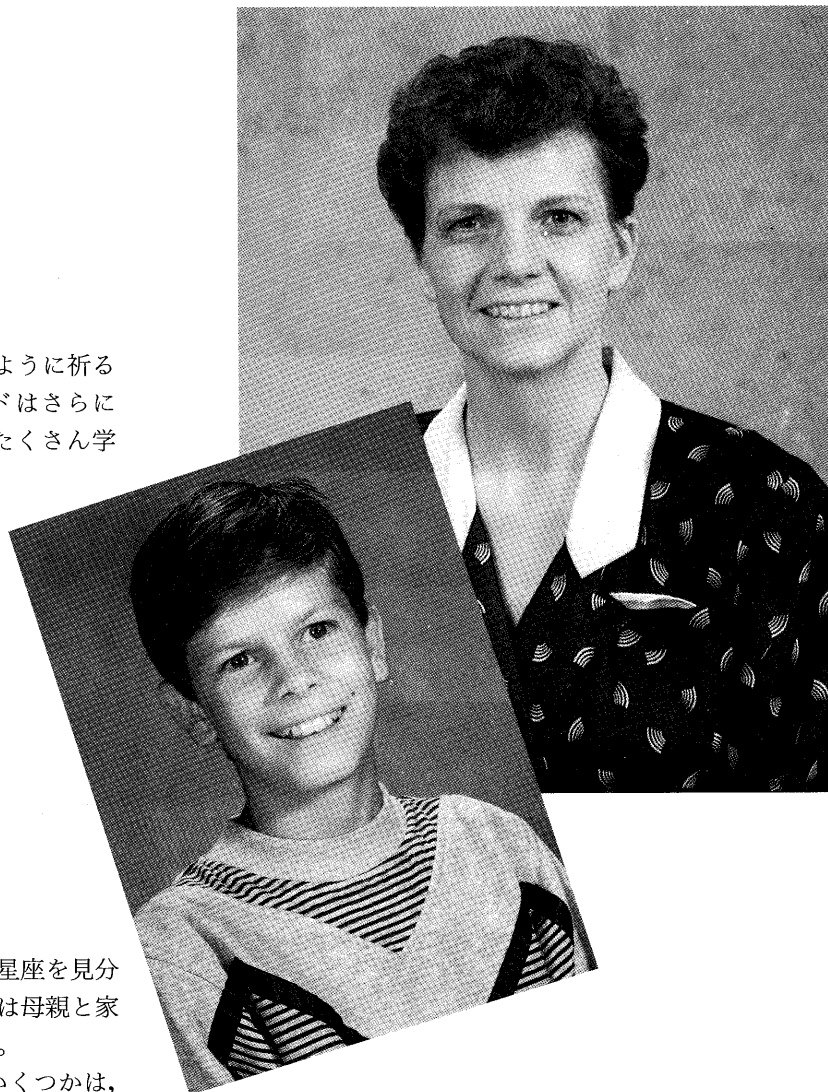
ジェレドの母親は肉体的にはとてもたくさんの助けを必要としていますが、息子にとっては今でも精神的に大きな支えです。ジェレドはこう言います。「お母さんは、お母さんが苦しんでいるのを見てぼくがどんなにつらい思いをし、腹立たしく思っているかをよく聞いてくれます。話しながら、ふたりで泣いてしまうときもあります。」

アンダーソン姉妹がスカウト隊の指導者をしていたころ、ジェレドのグループはアイダホ州立大学のプラネタリウムに行ったことがありました。みんな星座を見るのが大好きになり、ジェレドは今でもたくさんの星座を見分けることができます。去年の夏は、ジェレドは母親と家の芝生によく毛布を敷いて、星を眺めました。

「息子との会話で一番すばらしい思い出のいくつかは、そこで生まれました」とアンダーソン姉妹は語ります。「宇宙についてだけではありません。星の下で横になって前世や来世についても話しました。いろんな問題やこれからの人生に立ち向かうためにどうしたら一番いいかについて、話し合ったのです。」

ジェレドと母親にとってもうひとつの楽しい思い出は、1990年の4月と10月、ソルトレークシティで行なわれた総大会に家族で出席した時のことです。タバナクルの教会の特別席にアンダーソン姉妹と一緒に座れるのはひとりだけだったので、ジェレドが付き添うことになりました。アンダーソン姉妹は手すりのわきで車いすに座り、ジェレドは最前列の席を割り当てられました。彼は母親の世話をすべて引き受け、寒くないように足や肩をショールでくるんだり、足がけいれんしたときには静かにさすったりしました。

10月の大会の最後の部会の途中で、アンダーソン姉妹の発作が始まりました。ジェレドは母親の苦しむのを見て、すぐに薬を飲ませ、事なきを得ました。その様子を見ていたタバナクルのアッシャーのひとりには、ジェレド



にこう話したそうです。「私は今までたくさんフットボールの試合に出ましたが、きょうお母さんにやさしく接していた君ほど立派な人に会ったことはありません。」

ジェレドは母親を助けるために、自分の計画をあきらめることもときどきありますが、時間を見つけて友達と過ごすこともあります。父親か兄、姉たちがアンダーソン姉妹のそばにいてくれるときには、ジェレドは友達のトム・イラムと自転車に乗ったり、サッカーや野球を楽しんだりします。ジェレドはまた放課後、友達のサラ・ハーディが競技会のために練習するのを応援したりもします。

これまでの3年間、ジェレドと家族皆は一日一日を大切に過ごしてきました。ジェレドはこう語ります。「これまでは家族がいるのは当然だと思ってきました。でも今は、健康な人がどんなにあっけなく病気になってしまうかわかりました。天のお父様はぼくたちの祈りにこたえてくださいました。お母さんが天の家に召されても、霊の状態でもいつもぼくと一緒にいてくれることも知っています。」□

ホームメイキングを通して互いに教え導く

フィリピン、パサイ市のコンソラシオン・ペロベリロ姉妹はこのように述べています。「私は結婚当初、料理の仕方さえ知りませんでした。妊娠中も迷信にとらわれていたので医者のところへ行って診察を受けることもありませんでした。そして最初の赤ちゃんを亡くしてしまいました。」

彼女は涙を流しながらこう続けました。「あの時私が教会員だったなら、赤ちゃんを死なせずに済んだでしょう。」

バプテスマを受けた後、ペロベリロ姉妹は扶助協会で、水の浄化、衛生、栄養、応急手当、免疫などについて学びました。彼女はこう語っています。「子供たちと自分自身、そして家族の健康にどのように気を配ればよいかを学びました。」その後生まれた7人の子供たちは皆元気に育っています。彼女は現在ワード部のホームメイキング担当役員として奉仕し、これまで自分が学んだことを教えています。（『フィリピンの聖徒たち——信仰の民』「聖徒の道」1991年9月号、pp.11—12参照）

扶助協会におけるホームメイキングの目標は、日常生活の中で直面する困難な問題を解決し、家庭の中で福音を実践できるように姉妹たちを助けることです。このような目標を掲げたホームメイキングのプログラムから、多くの姉妹たちがその恩恵にあずかっています。ペロベリロ姉妹もそのひとりなのです。

ホームメイキングでの活動は、あなたの生活にどのような祝福をもたらしているのでしょうか。

個人と家族を強める

1831年に主はこのように勧告されました。「^{なんじ}汝ら相集る時は、……互いに



ILLUSTRATED BY LORI ANDERSON

教え導くべし。」（教義と聖約43：8）「導く」という言葉には、教え、改善し、啓発するという意味があります。天父と交わした誓約を通して扶助協会の姉妹たちは心をひとつにし、人格を築き、信頼を深め、技能を磨き、信仰を強め、より良い家庭と家族を築くのです。

世界中の姉妹たちが、ホームメイキングでの活動によって物心両面にわたって祝福を得られたと語っています。

ある独身ワード部では、ホームメイキングの時間を「心を豊かにするひととき」と考えています。共に学び、いろいろなことを一緒に行なう機会だからです。

ニュージーランドのオークランドでは、学習能力に障害を持った子供たちを助けたり、夫と死別、あるいは離婚した人、虐待を受けた人、末期的病状にある人などを励ましたりしています。

中央扶助協会会長のイレイン・L・ジャック姉妹は、最近アフリカへ旅行しました。そして、指導者たちがホームメイキングの集会を利用して、会員

に家庭で節約する方法を教えているのを目にしました。

ホームメイキングを通して個人や家族はどのように強められるでしょうか。

福音の原則を実践する

ホームメイキングの集会で姉妹たちは、人々に奉仕することを学びます。アルゼンチンのあるグループは、ワード部のひとりの姉妹が伝道に出られるように洋服を縫いました。

南アフリカの首都、プレトリアに住むペロニカ・ダレンダー姉妹は、ホームメイキングでひざ掛けの編み方を学び、年老いた人たちにプレゼントしました。ダレンダー姉妹はこう述べています。「ある目の不自由な姉妹から、自分のひざ掛けにどんな色の毛糸が使われているか教えてほしいと頼まれました。私に自分の指を取らせ、何度も何度もひざ掛けをなでさせたのです。その日私は、自分が受けているたくさんの恵みを数え上げながら家路に就きました。」

オレゴン州グランツパスでは、扶助協会の姉妹たちが恵まれない人たちのために87枚のキルトを作りました。ステーキ部扶助協会会長のルイズ・チャンピニズ姉妹はこのように説明しています。「姉妹たちの間にいくつか興味深いことが起こりました。目に見える目標を持って行なっていた活動の真の目的に気づくことができたのもそのひとつです。」

共に学び、行動し、奉仕の業に携わることによって、福音の原則を実践しましょう。そうすれば祝福を伴うホームメイキングの集会に秘められた大きな可能性に気づくでしょう。

姉妹同士のきずなを強め、奉仕の精神をはぐくむために私たちは何ができるでしょうか。□

◎ 聖徒の道 / 1992年8月号

ST. JOHN



ILLUSTRATED BY ROGER LOVELESS

文化の違いを超えて



七十人

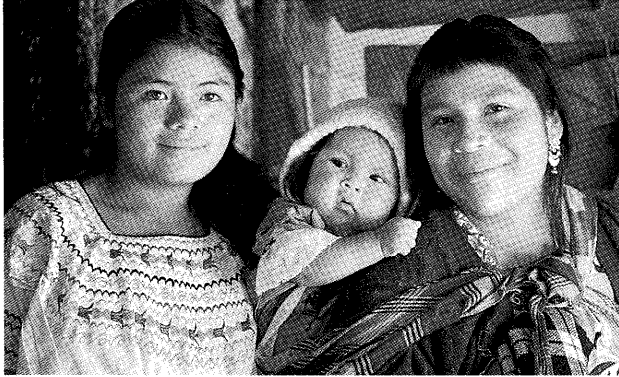
ジョン・K・カーマック長老

教会は世界中に広がっていますが、ひとつとなるということは、同化するという意味ではありません。

韓国のソウルでの合衆国陸軍の務めを終え、カリフォルニア州サンタバーバラの家に帰還したころのことです。私はカリフォルニア大学ロサンゼルス校の大学院に進学する準備として、まずロサンゼルスステーク部内に引っ越しました。1957年のことでした。ユタ州出身の指導者と北欧系の会員たちがほとんどだった当時のステーク部は、まだだれも気づかずにいたことですが、カリフォルニア州の平凡なステーク部としての時代に終わりを告げようとしていました。ごくまれに集会の出席者の中にユダヤ人やラテンアメリカ人の改宗者を見受けることもありましたが、このステーク部は同じ民族的背景を持つ人々で構成されていました。ステーク部中の人々から敬愛されていたジョン・M・ラッソン兄弟が、その長きにわたる卓越したステーク部長としての期間を間もなく終えようとしていました。その後の30年間にステーク部を待ち受けていた大きな変化を予測できた人などひとりもいませんでした。

ではここで1988年に目を向けてみましょう。教会歴史

多様な文化的背景を持つ人々を隔ててしまう要素がいくつかあります。それらを克服するに足る強力な一致は果たして存在するのでしょうか。その答えはまさに「然り」です。



PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND



PHOTOGRAPH BY PEGGY JELLINGHAUSEN



博物館では、世界各地に住む教会員の芸術家による初めての国際コンクールが催されました。福音に関連した題材を扱った作品なら、どんなものでも対象とされました。そしてコンクールは予想以上の成功を収めました。(1991年には2回目のコンクールが開かれました)教会の国際機関誌には、世界各国から出展された作品の写真が数多く掲載され、それ以外の作品も含めて教会員たちの目を大いに楽しませました。数カ月に及ぶコンクールの期間中、各地から寄せられた作品は博物館の壁に掛けられましたが、そのうちのいくつかは、時を超え、計り知れない価値あるメッセージを伝えるべく、今でも博物館に並べられています。

これらの作品は、実に様々な姿をしています。象徴的なテーマを表現したヨーロッパの巧みな作品の横には、色彩豊かで想像力あふれるラテンアメリカの絵画や、様々な福音のテーマを描いた太平洋諸島の会員たちの作品、また北アメリカ各地から寄せられた多様な芸術品が並べられました。簡潔で直接的、写実的な表現があるかと思えば、隣には抽象的、印象的、深遠で象徴的な表現で福音のテーマを扱った作品があるといった具合です。作品を目にする機会に恵まれた人々は、喜びと感動をもたらすこの統一された様々な芸術と才能の発露に心を満たされたことでしょう。救い主の存在と力が博物館の至る所で感じられ、訪れた人々を包んだのです。

この多種多様な作品に統一感を与えていたものは何だったのでしょうか。単なる素人作品の寄せ集めに終わらなかったのは、なぜでしょうか。それは、これらの作品が回復されたイエス・キリストの福音によって結ばれ、ひとつとなっていたからです。作品に表われた文化的相

違は、人に訴える力となり、コンクールをより良いものとしたのでした。何度も繰り返し足を運ぶ人々もいて、博物館を訪れる人の数はどんどん増えていきました。ひとつの文化や特定の地域の作品だけに重点を置いていたなら、これほどの感動を与えることはなかったでしょう。

ひとつに結ばれた教会を築く

今日の末日聖徒の中によく見受けられる多様性と統一性は、この国際美術コンクールによく表われています。昔の聖徒たちも、異文化の問題に直面しました。多様な文化の中にあって一致を図るのは、彼らにとっても決して容易なことではなく、常にうまくいったわけではありませんでした。当時は現在のような迅速な通信網や国際企業、海外旅行の普及、あらゆる分野にわたる書籍や雑誌などの情報源はありませんでした。それでも彼らは、いろいろな国の改宗者たちを結びつけ、ひとつの教会を築く道を見いだしました。

皆が感じているかどうかは別として、今日では異文化の多様性は教会と切り離せないものになっており、日々その色彩を強めています。国際コンクールで成功を収めたように、多様な文化的背景を持つ教会員をひとつに結ぶことができれば、色彩豊かで美しく、霊的にしっかりと結ばれた教会に成長することでしょう。そのためには、思慮深い指導者が一致のためのアイデアを会員と分かち合う必要があります。異文化の会員たちを喜んで歓迎し、意義ある奉仕の業に共に携わる兄弟姉妹のいるワード部やステーキ部では、一致への歩みも早まるでしょう。詩人のラルフ・ウォルド・エマソンが言ったように、「だ

れにでも自分を必要としている人がいる。だれもひとりで美しさや楽しさを生み出せない」のです。

良き時代である1950年代のロサンゼルスステーク部に話を戻してみましよう。当時ステーク部には、いわゆる少数派と呼べるのはわずかにひとつのユニットだけでした。ジョー・ブランデンバーグ支部長が管理していた、愛する南カリフォルニアろうあ者支部のことです。私が引っ越して来た時、その小さな支部はステーク部の人々にとって大きな喜びでした。ステーク部大会で、扶助協会の母親たちのコーラスが美しくリズムカルに手話で賛美歌を歌うのを聞くと、私たちは感動して心が震えたものです。ステーク部には困難な問題も多くありましたが、本当の異文化の多様性を迎えるのは、まだこれからだったのです。

このステーク部をはじめとして南カリフォルニア地区を変える出来事がそれから次々と起こりました。ジョン・K・エドマンズ伝道部長はろうあ者のためにふたりの宣教師を送りました。このウェイン・ベネット長老とジャック・ローズ長老の働きは、支部の人数を増やすのに大きく貢献しました。南カリフォルニアろうあ者支部はワード部となり、ブランデンバーグ支部長が監督となり、やがてワード部はいくつにも分割されて、ろうあ者支部がほかのステーク部にも広がっていったのです。

劇的な変化

そのころ、1950年代前半の韓国では、後になってロサンゼルスステーク部を変えるような出来事が起こっていました。古い歴史を持つこの国に戦争の波が押し寄せ、それまで西洋文化の影響や伝道活動から閉ざされていたこの地に、末日聖徒の軍人たちが流れ込みました。軍務を果たしながらも宗教を実践していた彼らによって福音の種がまかれたのです。

ちょうどその同じ時期に、^{キム・ホジフ}金浩植はニューヨーク州イサカにあるコーネル大学で博士課程に在籍していました。戦争によって無理やり家族と離れ離れにされた彼は、毎晩のように家族を案じては涙で枕をぬらしていました。そのような状況の中、彼は末日聖徒の友人たちの行かないと、その信奉する教義とに感銘を受けました。そして教会に入り、韓国出身の最初の長老になったのです。戦争が終わって韓国に帰ると、金兄弟は文部次官になり、一

方教会では韓国の聖徒たちの指導者になりました。『韓国の開拓者』「聖徒の道」1989年1月号、pp. 8—15参照

間もなく軍人に代わって宣教師が指導者となり、韓国語で福音が教えられるようになりました。当時軍隊にいた私は、ソウルに赴任した最初の宣教師、パウエル長老とディートン長老に会うことができました。支部や地方部、伝道部は、ワード部、ステーク部、そして神殿へと成長していきました。教会員も含めて、何十万人という韓国人がアメリカやほかの国々に移住して行きました。移住先でも、多くの人が教会に加わりました。こうして国内でも海外でも、韓国人は世界に広がる教会の一員として、その織り成すタペストリーにさらに色を添えるようになったのです。ロサンゼルスステーク部にも多くの人が移って来て、韓国人支部が組織されました。東洋が西洋と交わり始め、やがて西洋の中に溶け込んでいったのです。

戦争がもたらしたこの劇的な変化は、ほかの国々でも起こり、ベトナム人やフモン族、カンボジア人などが世界各地に散らばりました。苦難の風に追われて人々は東から西へと流れ、その結果福音への道が彼らの前に大きく開かれるようになったのです。ラテンアメリカやフィリピンでも、同じように福音の門戸が大きく開かれました。そして家族のために経済的に良い環境を求めて、多くの人がアメリカ合衆国に移り住むようになりました。アメリカでも自分の国でも、彼らは聖徒として教会員の輪に加わったのです。ロサンゼルスステーク部(ここでは例として取り上げます)では、急に多くの文化があちこちに目につくようになりました。オークランドステーク部やサンディエゴステーク部も、同様の変化を遂げました。指導者たちは、会員たちがお互いを愛し、受け入れ、仕え合ってひとつとなるように最善を尽くしました。外国語のユニットも組織されるようになりました。

「もはや異国人でもなく」

こうした変化を受け入れられなかった一部の会員は不平をこぼし、そのうちの多くはほかの地に移って行きました。昔を懐かしむ人々もいました。1978年にはそれまで以上に黒人の数が増え、教会員はさらに多様性を増しました。指導者たちは、ステーク部大会やワード部大会などの機会を利用して、愛すること、すべての人々を受

け入れること、そして一致することなどの教義を教えました。こうして聖徒たちの間に、ひとつになろうという意気込みが感じられるようになりました。当時、ロサンゼルスステーク部ウィルシャーワード部の扶助協会会長を務めていたピンクストーン姉妹はこのように述べています。「胸躍る、栄光に満ちた時代がやって来ました。ヨーロッパ系の人々ばかりだった時代は終わったのです。」

カリフォルニア州のロサンゼルスやオークランド、イリノイ州シカゴ、イギリスのロンドンなどの主要都市が、国際的な教会の中心地として変わって行くのを、多くの人が目にし、将来はどうなるのかと思いをはせるようになりました。間もなく各地域の主要都市圏にある多くのステーク部で、同じような変化がはっきりと見られるようになったのです。現在ではワシントンD.C.や、ブラジルのサンパウロ、オーストラリアのシドニー、ロンドンにあるハイパークなど、教会員はどこへ旅してもこうした多様性を目にする事ができます。それは人の心を打つと同時に、心を豊かにしてくれます。むずかしい問題も数限りなく起こりますが、事の大切さを理解している指導者の下で、うまく克服されています。

一致の力

多様な文化的背景を持つ人々を隔ててしまう要素がいくつもあります。それらを克服するに足る強力な一致はたして存在するのでしょうか。その答えはまさに「然り」です。

そのためには靈感に満ちた熱心な指導者が必要とされます。指導者がビジョンを持っていれば、人々はそれにこたえてくれます。また私たちには福音の教義が与えられています。イエス・キリストが教会の隅のかしら石であり、そこに加わる人々は、「もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族」なのです。(エペソ2:19) 神の予言者が、唯一の権威ある者として、教義や実際的な問題について指示を与えてくれます。人に与えられた神権の権能によって、バプテスマが施され、聖霊が授けられ、多様性を損なうことなく、教会員の一致という祝福が享受されています。権威ある聖典には、私たちが導く神のみ言葉が記されています。根本的な福音の儀式や、毎週の聖餐会、神殿の祝福が備えられ、あらゆる必要を満たしてくれる神権会や扶

助協会が組織されています。福音は家庭にあってその中心となっています。伝道活動を通じて福音を世に広める業、世を去った先祖のための神殿での奉仕、これらの業にすべての会員が携わっています。こうして、聖徒にとって重要で意義深い事柄が行なわれていくのです。与えられる賜を最大限に生かせるよう、ふさわしく生活する人は皆、堅固な土台である聖霊の力によって、ひとつに結ばれるのです。

一致を妨げるもの

こうしたわかりやすく、一致を生み出す教義や儀式、活動とは反対に、多様な文化の美しい一致を作り出すうえでの障害がいくつもあります。人種や文化の違いによる差別、自分は別の種類の人間であるといった態度がそうです。福音は、理想的な一致を生むためには驚くほど効果的です。しかし人間は不完全です。言語の違いに対する不安、肌の色の違う人を受け入れることに対する恐れ、独身者を疎外するといったことなどはすべて一致を阻む障害になっています。大抵の場合、虐待、孤立、差別といったことは、人にレッテルを張ることによってさらに拍車がかかります。ほかの教会員に、たとえばインテリであるとか、活発でないとか、フェミニスト、南アフリカ人、アルメニア人、ユタ州出身のモルモン、メキシコ人などといったレッテルを張ることは、その人を虐待したり無視したりする言い訳になっているようです。エノクの市のような社会を作ろうとするなら、こうした問題について考え直す必要があります。

私たちは神とひとつになるとき、互いに一致することができるのです。また互いに一致するときに、神とひとつになることができるのです。

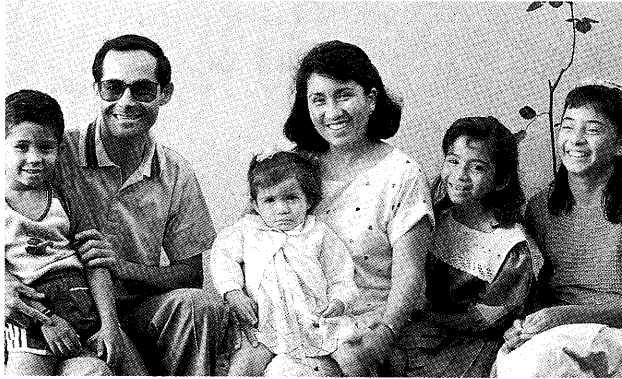
自然に生じるはずの一致というものは、多くの場合、「規則に規則を加え、誠命にいましめを加え」(教義と聖約98:12)られて、苦しい努力の後に少しずつ生まれます。

ペテロが次のように述べたのは、はっきりとした具体的な啓示(使徒10:9-16参照)が示されたからでした。

「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受け入れて下さることが、ほんとうによくわかってきました。」(使徒10:34-35)

パウロのように、すべての人を同じように受け入れるという考え方を、たやすく自然に身につける人もいるで

福音は家庭にあってその中心となっています。伝道活動を通じて福音を世に広める業、世を去った先祖のための神殿での奉仕、これらの業にすべての会員が携わっています。こうして、聖徒にとって重要で意義深い事柄が行



PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND

しょう。ロサンゼルスステーキ部のように、私たちも全体的には、多くの文化の中にあって一致を図るという義務を無難にこなしてはいます。しかし、兄弟姉妹の持つ様々な文化の違いを祝福として味わうためには、まだできることがたくさんあるのです。そのために取り組み方を大きく変える必要があったとしても、私たちはほかの人々との違いを本当に理解するようにならなければなりません。今後、教会には今以上にもっと広く多様な文化が混在するようになるでしょう。そのときに教会に加わる人々には、パウロのような指導者や友達と与えられるべきなのです。

お互いを結ぶきずな

基本に立ち返るために、教会の組織や事務手続き、礼拝行事の簡素化も図られているようです。賢く秩序正しい変革が、教会全体でなされています。新しい予算交付制度も、そうした簡素化のひとつの例です。

多様なものをひとつにまとめるためには、相当の努力が必要とされることを、私は経験によって学びました。積極的で力強い指導を受けながら働く必要があります。自然の成り行きに任せていたのでは、一致はあり得ません。孤立や差別が、教会のあらゆる場所ではびこってしまいます。

どんな場所にあっても、ほかの人を快く受け入れて輪の中に加え、ひとつとなるような気運が生じるよう、一人一人が責任を負う必要があります。そしてこの責任に高い優先順位をつけるのです。また特に、教えと模範によってその方法を示してくれる指導者が必要です。私た

なわれていくのです。与えられる賜を最大限に生かせるよう、ふさわしく生活する人は皆、堅固な土台である聖霊の力によって、ひとつに結ばれるのです。



PHOTOGRAPH BY RUSS HOLT

ちはだれにでも公平に振る舞わなくてはなりません。差別や孤立、疎外といったものを味わっている犠牲者に対してはなおさらです。宗教、文化、人種、民族、性別の違いをあげつらって人を傷つけ、軽んじるような冗談を、ユーモアと取り違えないようにしましょう。私たちは皆、神に似せて造られた者なのです。しばしば見受けられる、一般的になっているこうしたふさわしくない態度を取る人に出会ったときには、その場を立ち去るか、間違いを正すように何かすべきです。これは一人一人が果たすべき責任なのです。

南アメリカや、中央アメリカ、ブルガリア、チェコスロバキア、ギリシャ、ハンガリー、そしてポーランドに新しい伝道部が創設され、そのほかの国々が、福音を宣べ伝える地として奉獻されるにつれ、教会は目覚ましい速さで世界中に広がっています。人種や文化、民族の多様性も、それに伴って必然的に拡大していくでしょう。実にすばらしい時代です。ロサンゼルスステーキ部のように、私たちはそれによってさらに高められるのです。

孤立する人を減らし、すべての人を受け入れる機会を逃すことのないように願っています。また同じ教えを信じる者同士のきずなで結ばれた多様な人々との交わりを通して、人生を豊かにすることができるようになります。教会博物館の国際美術コンクールの時のように、愛とキリストとその福音を通してお互いをひとつに結びつけるきずなを見いだそうではありませんか。文化の違いを超えた一致という、うれしい結果を生むことができるように、またモルモン経の中の「何らみだりがわしい行いがなかった」(IVニーファイ1:16)時代のような幸福な状態を楽しむことができるように願っています。□

幸福なんてあるのかしら

バーバラ・チェイクキナー口

(ピエトロ・カラリーニによる聞き書き)

イタリアのパドワにある我が家に、ふたりの青年をようやく招き入れたのは、彼らの熱意に負けたためです。ふたりが末日聖徒の宣教師だと知って、私はいろいろな言い訳をひねり出しましたが、ふたりは構わず訪問を続けました。そしてとうとう、居間に腰を落ち着けて、私は幸福について話し合うことになったのです。なんとも苦手な話題でした。

おしゃべりは楽しかったのですが、人はこの地上で幸福になれるとふたりが言うのを聞いて、私は反発しました。人生はただ悲しいことばかりで、幸福になれるのは死んでから神様と一緒に住む時だと、私は考えていたのです。

当時の私には、私を深く愛してくれる夫と3歳になる娘がいて、新築の家もあり、自分は恵まれていると考えるべきだったと思います。ところが私は、それまでに受けた人生の試練のために、別の考え方を抱くようになっていました。私は父親なしで育ち、母親ともうまくいかなかったのです。6年前には、生後3日の子供を亡くし、その死も納得できずにいました。

こうして私は不幸で、何事にも無関

心だったのです。宣教師たちは帰り際に次回の約束をして、モルモン経を置いていきました。本には何か所かの聖句に印が付いてあり、私にそれらを読むように言いました。私はその後2、3日でそれらの聖句を読み終わりましたが、理解できませんでした。

宣教師は毎週訪問し、最初はふたりだけでしたが、やがて私の許しを得ると、教会の姉妹をひとり連れてきました。私は次の日曜日に、彼女と一緒に教会の集会に参加することにしました。その日、教会に入ると、まるでいつも来ているかのような気がしました。

何人かの人が笑顔で歓迎して、温かい握手をしてくれました。だれもが穏やかそうで、私はすぐに平安を心に感じました。この教会に足を踏み入れたのが初めてのような気がしなかったのが初めてのよう怖いほどでした。その1週間は、気持ちが落ち着かずなかなか眠れませんでした。

それで宣教師たちが来た時に、言われたような幸福や平安が感じられず、むしろ不安で眠れないのはなぜかと尋ねました。彼らはそれには答えず、バプテスマのチャレンジをしました。私

は無遠慮に声を立てて笑い、訪問は続けていいけれど、教会には入りませんと、宣教師たちに言いました。

ところが、それを夫に話して、またひとしきり笑った後で私はそれまでの出来事の一つ一つ考え始めたのです。ふいに心の中で何かが解き放たれたような感じがして、バプテスマを受けなければならないと感じました。

夫は、私の決心を初めは冗談と受け留め、次には口論の種にして、なんとか思いとどまらせようとしました。私の職場の同僚がみんなカトリック教徒なので、仕事を辞めさせられるかもしれないとまで言いました。しかし、日がたっても私の決意が変わらないので、夫はとうとう許可してくれました。

宣教師から残りの話を聞き、ついにバプテスマの日がやって来ました。1986年10月26日、宣教師たちが家に来るようになってから2カ月後のことでした。私は興奮で体が震え、先行きが不安でした。夫は娘と一緒にバプテスマ会に出席してくれました。

バプテスマの水に入ると、すぐに恐れは跡形もなく消え、晴れやかな解放感を覚えました。その時の幸福な気持

ちは忘れることができません。水をくぐった時、亡くなった娘や親族も私の選択を喜び、幸福を感じてくれていることがわかりました。

あの日から4年が過ぎました。教会に入ってから知った平安と喜びは、以前に経験したことのないものです。私は以前より良い妻、良い母となつて、今は支部の扶助協会会長として働いています。娘はいつも初等協会に出席して、今はバプテスマの準備をしています。私は何の問題もなく、以前の仕事を続けています。

試練に遭って押しつぶされそうになるとき、私は救い主、イエス・キリストを信頼することを学びました。また、神殿に参入して自分のエンダウメントを受けました。娘を亡くした悲しみはほとんど癒えました。永遠に娘を失ったわけではないことを、今は知ったからです。

私を見だし、モルモン経と、教会員であることの特権と、本当の幸せという大切な贈り物をくださったふたりの主の僕に、私はいつまでも感謝し続けることでしょう。□



アーノルド・
フリーバーグが描く

モルモン経 の世界

「挿 絵の目的は、読み手に豊かな経
験の一部を示すことにあります。
つまり挿絵に描かれた特定の物語や本を
読んで、読み手自身のものとなるような
経験を指し示すのです。」アーノルド・
フリーバーグ兄弟はこう書いています。

ここに紹介するモルモン経のいくつか
の場面を描いた後で、フリーバーグ兄弟
は次のように記しました。「モルモン経
に対する私の理解は計り知れないほど深
まりました。……モルモン経に記されて
いる偉人たちが、生き生きとした実在の
大いなる人物として感じられるようにな
りました。」(「チルドレンズフレンド」
1952年12月号, pp. 496,522)

荒野でリアホナを発見するリーハイ

「父の非常に驚いたことには、
地上に珍しい細工の
円い球が一つあった。
それは純良しんちゆうな真鑑しんかんでできていて、
その円い球の内部には
二本の指針さしがあり、
その一本は
荒野で行くべき方向を指していた。」
(1ニーファイ16:10)







約束の地に着く
リーハイとその民

「私ニーファイは
船の舵をとって……
約束の地に向って
海上を進んで行った。

かようにして、
私たちは海上に
何日も何日も暮した後、
ついに約束の地に着き、
陸に上って天幕を張り
その地を
約束の地と名づけた。」

(I ニーファイ 18 : 22—23)

反抗的な兄たちを制する若きニーファイ

「兄たちは私に腹を立てて海の深みに私を投げ返もうと思った。
そして、兄たちが私を捕えようとして近よってきた時に、
私は『全能の神の御名によって命ずる、私に手を触れるな。
私は……神の力に満されているから、
私に手をかける者は誰でも
乾いた芦のように枯れてしまうからである。
また神がかれを打ちたもう……』
とかれらに言った。」
(I ニーファイ 17 : 48)





ラモーナイ王の羊の群れを
守るアンモン

「かれらは
……アンモンを打ち殺そうと
棒をもって出てきた。

ところが棒をふり上げて
アンモンを
うち倒そうとした者たちは、
アンモンに剣でもって
みなその腕を切り落された。

[アンモンは]このように
……うちかかってくる
棒を防いだ

……まことに敵の数は
少くなかったが、

アンモンは
腕に受けた力をもって
これを撃ち退けた。」

(アルマ17：36—37)



ノア王に主の言葉を伝えるアビナダイ

「アビナダイは……言った。

『私にさわるな。もし私に手をかけるならば
神が必ずあなたらをうち破りたもうであろう。……』

アビナダイがこう言った後にも

ノア王の民は思い切ってアビナダイを捕えなかった。
それは主の『みたま』がアビナダイに満ちて、
……アビナダイの顔がまばゆく輝いていたからである。」

(モーサヤ13：2—3, 5)

モルモンの泉でバプテスマを施すアルマ

「アルマはこれらの人々に教えを施し、
悔改めと^{あがな}贖いと主を信ずる^の信仰とを宣べ伝えた。

これらの人々はみなモルモンの泉でバプテスマを受け、
充分に神の恵みを受けた。」(モーサヤ18：7, 16)





アンモンの民の
2,000人の若者から成る
軍隊を率いるヒラマン

「かれらはみな青年であって
筋骨たくましく活潑な
勇士であつ……た。

かれらはみな
神の命令に服従することと、
神の前に正しく真すぐに
暮すこととを教えられ、
真実な心を持つ
真面目な青年であった。

ヒラマンは、
……民を助けようと、
その二千人の若い兵士を
率いて出陣した。」

(アルマ53：20-22)



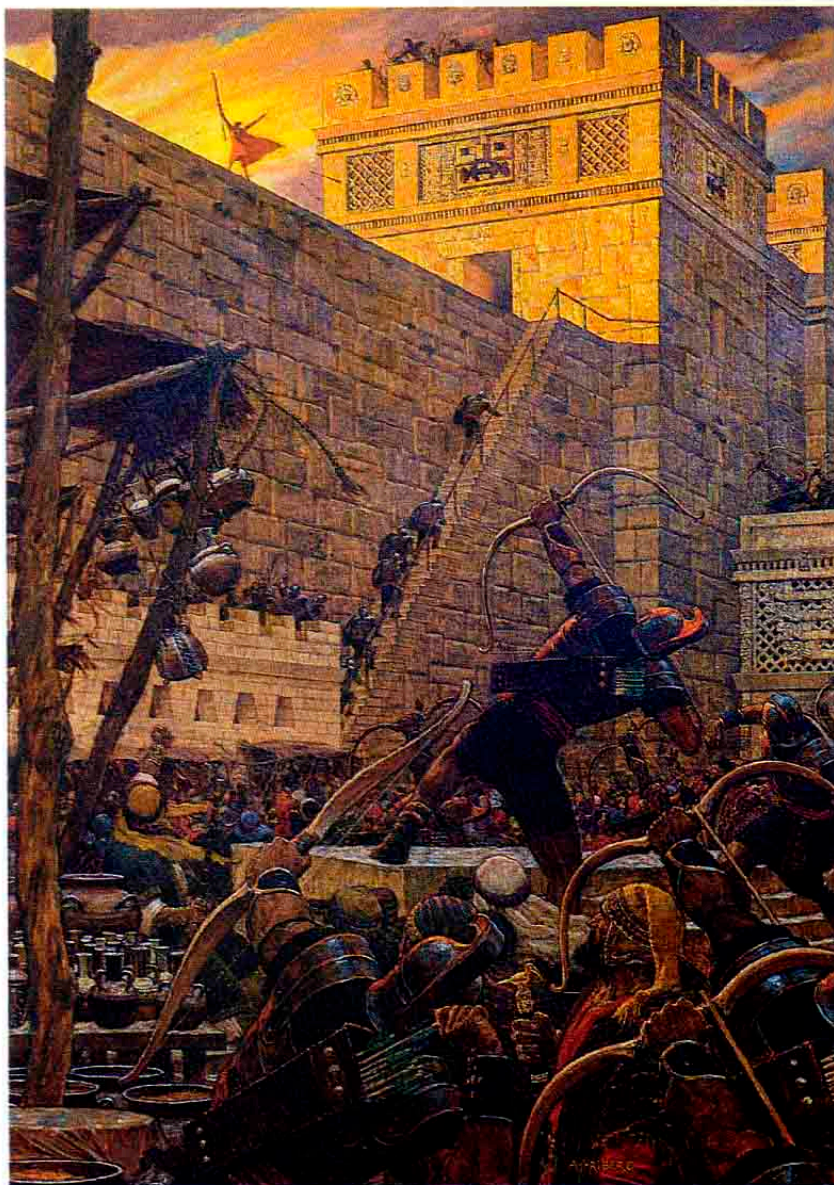
自由の旗を掲げる司令長官モロナイ

「ニーファイ人の軍の司令長官モロナイは、
……自分の衣を裂いてその一片をとり、
その上に『われらの神と宗教と自由と平和と妻子のために』
と書いてこれを竿の先にかけ、……

(これを自由の旗と言った)

……自分の兄弟である教会員らに
ひきつずき自由の祝福を下したまわるよう
ひとえにその神に祈り願った。」

(アルマ46：11-13)



イエス・キリスト、
ニーファイ人に現われたもう
「群衆は……天を仰ぐと、
天から一人の男の方が
降りたもうのが見えた。
このお方は
白い衣を召して、降ってきて
群衆の中に立ちたもうた。……
そのお方は手を伸して
群衆に話しかけて
仰せになった。
『見よ、われは
イエス・キリストなり。
予言者らがこの世に来ると
証をしたるその者なり。』」
(Ⅲ ニーファイ11：8—10) □

予言を伝えるレーマン人サムエル

「市民はサムエルに都の内へ入ることを許さなかったから、
サムエルは都の城壁の上へのぼり、
……予言を……言った。

一方、サムエルの言葉を信じない者たちはサムエルに腹を立てて、
城壁の上に立っているかれに石を投げつける者があり、
また矢を射かける者も多かったが、
主の『みたま』がサムエルと共にいましたから
投げた石も射かけた矢もかれには当らなかった。」
(ヒラマン13：4；16：2)



燃える思い

ラリー・A・ヒラー

別に疑っていたわけではありません。ただ、わからなかったのです。

当時、私は17歳でした。幼いころから教会にはずっと活発に集っていて、8歳でバプテスマを受け、12歳で執事に聖任されました。セミナーに通い始めて4年目になっていましたが、まだ本当に証があるとは思えなかったのです。

親友のゲーリーにとって、証をすることはむずかしくないようでした。聖餐会^{せいさん}で私たちはよく聖餐のテーブルの前に並んで座りました。断食証会の日、彼はいつも私の隣で感動に体を震わせていました。そして、必ず立ち上がって証を述べるのです。声を震わせ、目を涙でいっぱいにして、みたまを感じることのすばらしさを証するのです。

そんなゲーリーがうらやましく思えました。同時に、何かいらだたいしい気持ちにもなりました。ゲーリーのように涙を流すのは、ちょっと恥ずかしい気もしましたが、彼のような証が自分にも欲しいと思いました。おそらく当時の私はそれほど深刻には望んでいなかったのでしょう。その後も、深く考える機会もないままに時間が過ぎていきました。

こうして、セミナーの最終年度を迎えました。テーマはモルモン経です。しかも、モロナイ書第10章4節から5節が中心課題です。モルモン経を初めから終わりまで通して読み、それが真実であるという証を得られるように祈る、つまりモロナイの約束を試すようにチャレンジを受けました。

最初は、読んだり読まなかったりする日々が続きましたが、そのうち寝る前の日課として毎晩モルモン経を読むようになりました。読んだ後ベッドの横にひざまずき、モルモン経や教会が真実であるという証が得られるように主に祈ったのです。

ですが、何も起こりませんでした。

いつも、心のどこかにゲーリーの強い証が忘れられずにありました。教義と聖約第9章8節で、主はオリヴァ・カウドリに次のように言われました。「われ^{なんじ}汝の心を内に燃やさん。」

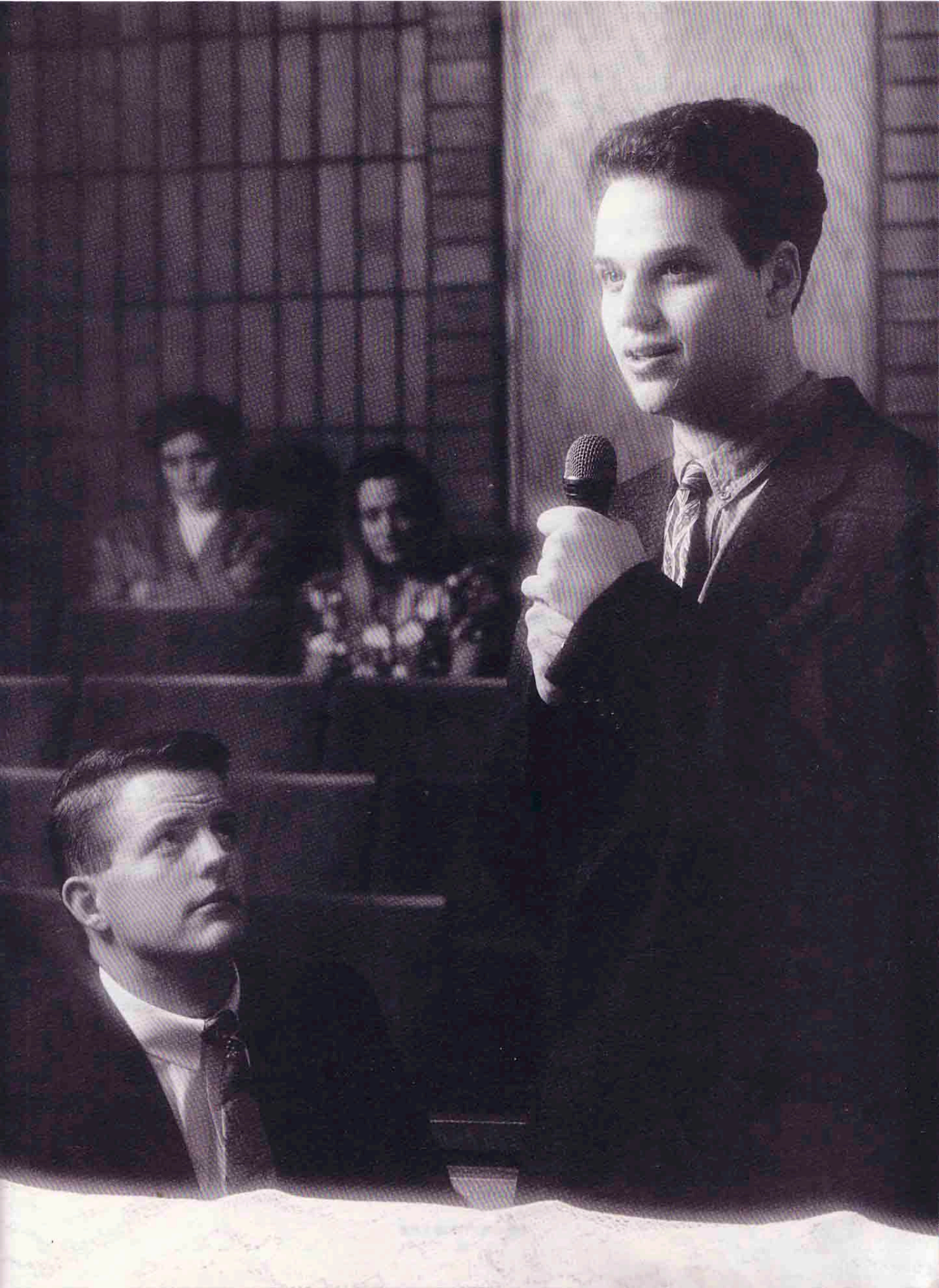
毎晩、毎晩、私はベッドの横にひざまずいて心から祈り求めました。それからベッドに入り、燃えるような証を待ち望みました。そんなある晩、祈りの途中で、ふと自分自身に問いかけてみたのです。「真実かどうか、私はすでに知っているのではないだろうか。」

その時です。ひとすじの光の柱もなく、声も聞こえません。それは、私が期待していたような燃える感情でもありませんでした。その代わり、心の中にひとつの自覚が生じたのです。

私は、すでに知っていたのだと実感しました。平安と安らぎ、厳かな気持ち、これこそ私が求めていたものだったのです。私はすでに知っていたのです。

以来、オリヴァ・カウドリに語られた主のみ言葉が、これまで以上に理解できるようになりました。「誠にまこと^{まこと}にわれ^{なんじ}汝に告ぐ、汝もしこの上の証^{あかし}を得んと欲せば、これらのことの真理を悟らんとして汝が心の中にわれに向いて呼びし夜のことを深く思うべし。われ汝にそのことに就きて心安かれと告げしにあらずや。汝、神よりの証詞より大いなる証詞をいずこに得るや。」(教義と聖約6：22-23)

これからも、何度も燃えるような気持ちを感じることでしょう。アルマが言うように、何度も喜びに胸が膨らむことでしょう。(アルマ32：28参照)しかし、その時は与えられた静かな答えこそ私の求めていたものであり、心にとどめておくべきものでした。主は私に心安かれと告げられたのです。□



アビジャンでのキャンプ

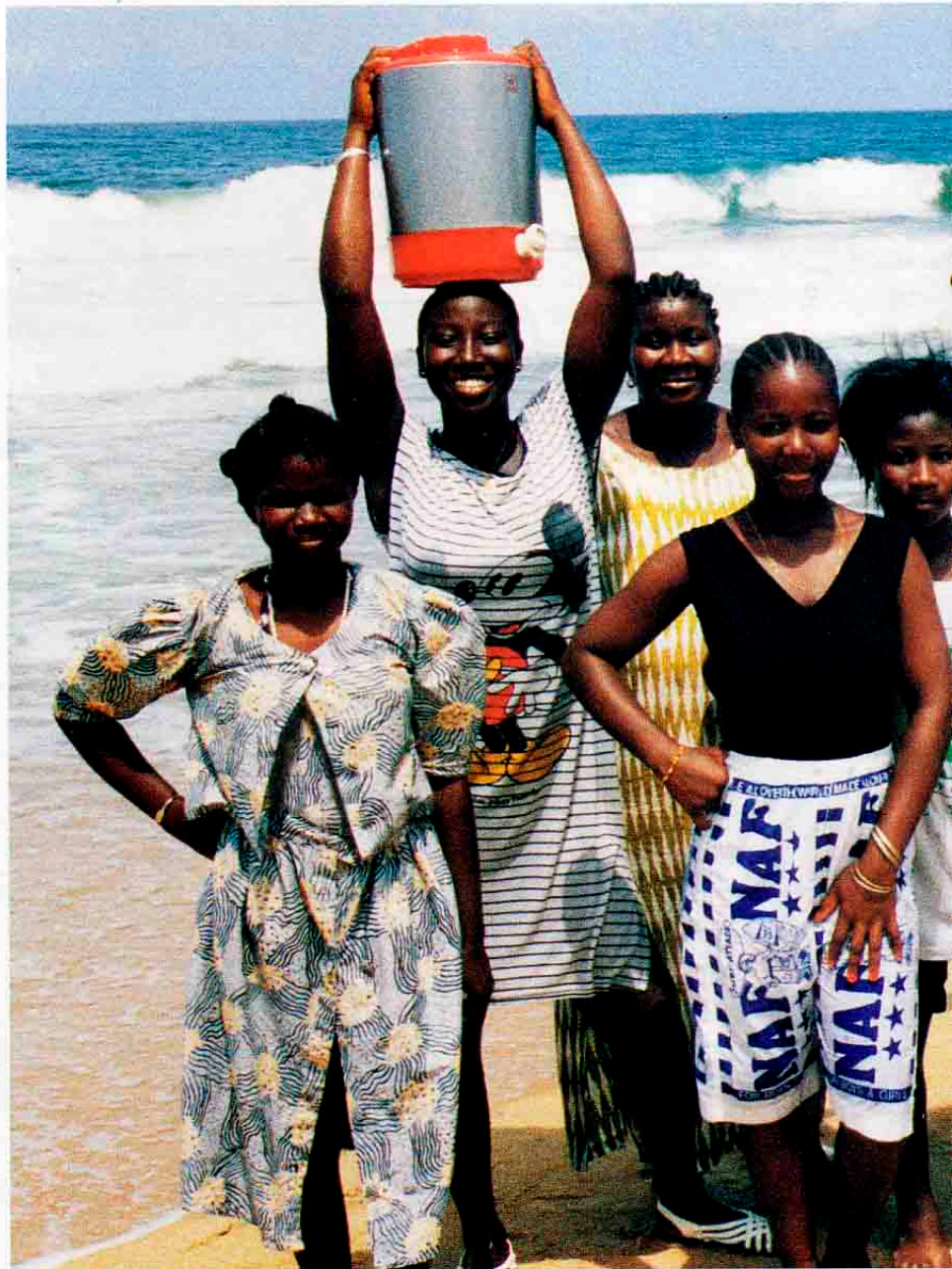
チャーリー・ラウンディ・アーノルド

「ヴネ ヴネ サン クランドル
ル ドゥヴォアール……。」

白い砂浜に打ち寄せる波を見ながら、ジャンヌ・グー姉妹が12メートルにもなるヤシの巨木の陰で歌っています。彼女の好きな『恐れず来たれ、聖徒』です。グー姉妹が歌っていると、アフリカの象牙海岸(コートジボアールの別称)アビジャン地方部にあるふたつの支部の11人の若い女性が証会のために集まってきました。11人のうち9人はグー姉妹と同様、去年バプテスマを受けた姉妹たちです。

少女たちも加わって、その歌は集会の開会の歌となりました。証会は彼女たちが気持ちを伝え合う機会となっています。ココディ支部のローレルクラスで会長をしているジゼル・カロングが、立って証をし始めます。「教会は真実です。教会に入って私の生活は随分変わりました。」ジゼルは9人兄弟の長女で、下は男の子ばかりです。彼女は母親と弟たちが教会に入る準備ができるまでバプテスマを受けるのを待っていました。去年ジゼルは女の子5人のグループでキャンプに行きましたが、その中で彼女を含めてふたりが教会員ではありませんでした。キャンプの後でふたりとも教会に入りました。今年のキャンプには11人も集まり、ジゼルは多すぎるように感じました。

16歳のタペ・キャロルが立って証を



PHOTOGRAPH BY CHIRLEY ROUNDY ARNOLD



象牙海岸アビジャン地方部の11人の若い女性たちが年に1度のキャンプで浜辺に集まった。その様子には、文化、言語、証、娯楽の調和が感じられる。

述べています。「私は教会に入るまで本当の幸せを経験したことがありませんでした。宣教師から福音を学んだり、教会の集会に出席したりしていると幸せな気持ちに包まれます。」

長い赤褐色の髪と白い肌をしたマリー・ブロードヘッドは象牙海岸に住んで3年になります。もうすぐ15歳になる彼女はココディ支部のマイアメイドクラスの会長です。海岸でのこのキャンプは彼女が友達と一緒にできる最後の大きな活動となるでしょう。彼女の家族はもうすぐアメリカに帰国し、その後、ベネズエラに移ることになっているからです。マリーは立って自分の気持ちをこう述べました。「私は皆さんとお別れするのが寂しくてたまりません。皆さんは私の友達になってくれました。」

マリーが最初にここに来たころ、ブロードヘッド家は、毎週自宅英語を使って安息日の集会を開いていました。1987年9月に十二使徒定員会のマービン・J・アシュトン長老が象牙海岸を訪れ、福音を広めるためにこの国を奉獻しました。長老はブロードヘッド家に滞在し、マリーのお父さんのテリー・ブロードヘッド兄弟を、アビジャン支部の最初の支部長に召しました。以来、彼らは象牙海岸の公用語であるフランス語で集会を開くようになりました。マリーは日曜日ごとにあるフラ

ンス語の速習コースを取り、今では上手にフランス語を話せるようになっていきます。

マリーは50人の小さな支部が、5つの支部から成る400人以上の会員を擁する地方部に発展するのを目にできました。クラスでの発言や福音に添った生活をするという模範を通して、マリーは同年代の少女たちが福音を学ぶのを助けてきました。

最後の方で立ち上がった少女はこう言います。「福音のメッセージを聞いてから、幸福になるためには教会に入らなければならないと思いました。教会に入るのは私にとって大切なことでした。私は今では本当の幸せを知っています。」教会の会員になったことで彼女は自分の家を出なければなりませんでしたが、後悔はしていません。

浜辺での証会は終わりました。グー姉妹はキャンプ場まで歩いて戻る途中でヤシの実を拾い、頭の上に載せました。そしてバランスを取りながら、歩調も崩さず歩きます。娘のフィロメヌ・グーも母親に倣ってついて行きます。母と娘はヤシの木の下を共に背筋をまっすぐ伸ばして上品に歩いて行きます。

アフリカの少女たちは小さい時から頭の上に物を載せて運ぶ方法を教わります。それは練習を積むと物を運ぶのにとっても便利な方法です。キャンプの間、少女や指導者たちは頭にたくさんの物を載せて運びます。たとえば、鍋、まき、キャンプ技術の本、リュックサック、それに12リットルも入る水がめなどです。

文化と友情の交わり

アビジャンでのキャンププログラムには、異なった文化と言語がうまく溶け合っています。ハイキングの歌はフランス、イギリス、そしてアフリカの歌まで様々です。少女たちは皆、自分たちの部族の言葉のほかにフランス語を話します。ベタ語とパウレ語はここで最もよく使われている言葉です。

アビジャンは遠くの村や近隣のアフリカ諸国から集まる様々な部族のつぼと言えます。人々はより良い仕事、より高い収入を求めてここに來ます。両親と一緒に來ている若い女性たちは慣れ親しんだ生活からはかけ離れてしまっています。彼らは教会や地方部の活動で自分と通じるものを持った新しい友達を作るのを楽しみにしています。

アフリカの人々は臆せず新しい友達を作り、歌や踊りを通して自分の気持ちを表現します。ハイキングで少女たちは互いに歌を教え合うよう勧められます。アボボ支部のアモアヘッドウィッジ・コヴィはいったん教え始めると、夢中になって何曲でも教えてくれます。少女たちは、アフリカの踊りを交えて教える彼女の歌に合わせて手拍子をし、後について歌うのです。

少女たちはロープの結び方、太陽の位置から北の方角を知る方法、救急法を互いに教え合います。またキャンプ技術の本をおもり代わりにしたビニール袋、それに空のプラスチック瓶を用いて、マウス・ツール・マウス式の人工呼吸法についても学びます。

何人かの少女たちと同じように、13歳のミシュレヌ・クワメもキャンプは特別な行事であると思っているので、

よそ行きのドレスを着て來ました。どんな場合でも巻きスカートやドレスを着るのはここでは珍しいことではありません。それが当然とされているのです。そうはいつてもキャンプファイアの火をつけるとき、彼女はドレスを汚さないように、またこがさないように気をつけなければなりませんでしたが。

キャンプ地はアビジャンからわずか30分の所ですが、何人かの少女にとって、海に來たのは初めての経験でした。アフリカの少女たちは、もし両親にゆとりがあれば学校へ行きますが、そうでない場合は、家計を助けるために働きます。遊ぶ時間などほとんどないのです。

アビジャン市は美しい瀉湖せきこに隣接しています。淡水の瀉湖がわずか30メートル幅の狭い砂地で海と分けられている場所もあります。瀉湖を見ていると、波と戯れたくようになりますが、泳ぎ方を知っているのはマリー・ブロードヘッドとクリスタル・アモルドだけです。ほかの少女たちは、静かな浅瀬で泳ぎを覚えようとしています。目の前の海は美しいのですが、波が荒く、危険です。海岸地方の村人でさえも、波打ち際は泳ぎません。泳いだり水浴したりするときは瀉湖に入るのです。海に出るのは、釣りのときくらいです。

少女や指導者たちが帰りの準備をしています。彼らは共に笑い、学び、証を分かち合いました。信仰と友情はさらに強まりました。少女たちは來年のキャンプを楽しみにしています。そして友達を誘う計画も立てています。□



ALFRIBERG

かつての偉大な國に別れを告げるモルモン・アーンホルド・フリーバーグ画

「さて私は死人だ私の民のことを悲しみ悼んで全身が引き裂ける思がし、次のように叫んで言った。

美しい者たちよ。お前たちはなせ主の道を離れたのか。美しい者たちよ。お前たちはなせお前たちを抱えようとして両手をひろげたもうたイエスを拒んだのか。

見よ、お前たちはこれさえしなかったならば死ななかつたものを。しかしお前たちはもう死んでしまって、私はお前たちの亡霊を悲しみ歎いてる。」(モルモン6：16—18)



近年，世界中の人々がイエス・キリストの福音を受け入れるにつれ，教会は劇的な成長を遂げている。しかも，教会員が世界各地に移住するに従い，多くのワード部やステーキ部は，文化的，民族的な多様性を示すようになった。こうした多様性に伴い，私たちには，聖徒の一致を保つという課題，すなわち神と，そして同胞とひとつになるというチャレンジが与えられている。(本誌「文化の違いを超えて」 p.26 参照)

岩の上に家を建てよ

アジア北地域会長会会長
W・ユージン・ハンセン

救い主は、山上の垂訓を閉じるに当たって、非常に重要な勧告をお与えになりました。それは、マタイによる福音書第7章24節から27節に記されています。

「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。

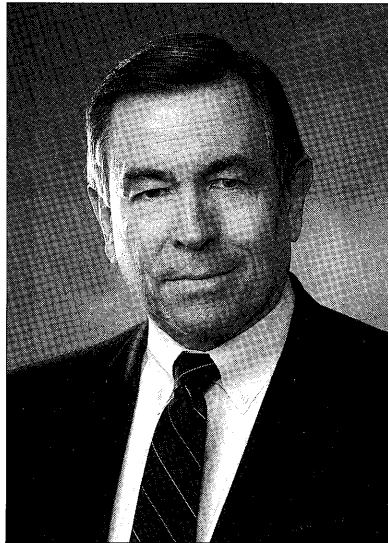
雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。

また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。

雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」

これは私たちの霊の家、言い換えれば私たちの証について語られたものです。堅固な土台の上に家を建てるのは、なんと重要なことでしょうか。もし私たちが、啓示された神のみ言葉を研究し、それに従うことによって、また断食と祈りを通して、さらにベンソン大管長が勧めておられるように「器の内側を清める」ことにより自分の土台を築いていくなら、岩の上に家を建てた者のようになれるでしょう。そして、疑いや誘惑の風が吹きすさび、批判や思いやりの欠如、失望や嫉妬、不親切、人間的な弱さなどの雨が降りつけても、私たちの霊の家は倒れないでしょう。つまり教会を離れたり、証が弱くなったりすることはないでしょう。

霊的な強さを培うには、日々の生活における絶え間ない努力が必要です。



霊的な生活を送るならば、心に平安がもたらされ、人生は喜びと幸福に満たされます。来るべき世における最も偉大な賜、すなわち永遠の生命について理解するうえでも、霊的な生活は助けとなるでしょう。この賜を受けることによって私たちは、地上での生涯を全うした後、天父と御子イエス・キリストのみもとで生活できるようになります。

主の教会の会員となり、教会のもたらす祝福にあずかれるのは、なんと恵まれたことでしょうか。私たちは、霊的な平安と喜びを得るには何をしなければならぬかを知っています。主は教義と聖約第52章の中で、私たちがサタンに欺かれないように、従うべき規範を示しておられます。

「またわれ汝らの欺かれざらんために、あらゆるものに規範を与う。そはサタン普くこの地に在り、出できて諸々の国民を欺けばなり。」

この故に、悔いる精神を持ちて祈る者わが儀式に従うならばわれこれを受

け入るべし。」(14-15節)

幸福で満ち足りた生活を送り、霊的に豊かな人生を歩むために、これらの規範が与えられているのです。これこそイエス・キリストの真の教会です。あらゆる良きものを与えてくださる主に信仰を持ち、信頼を寄せましょう。神のみ言葉という岩の上に霊の家を築きましょう。そうすれば、風が吹き、雨が降りつけても、私たちはイエス・キリストの福音のうちに固くとどまることができるでしょう。

子供や孫を持つ人々には、彼らが砂の上ではなく岩の上に家を建てる大切さを理解できるように助けるという特別な責任があります。今日、巧妙な誘惑が至る所に見受けられます。これらは、しばらくの間若人を惑わしたり、狡猾な業によって彼らの目をくらませたりしています。

私たちは、若人が自らを道徳的に清く保ち、救い主との個人的な関係を早い時期に築けるよう助ける必要があります。これらのことを成し遂げるにはどうすればよいのでしょうか。それは、毎日捧げる個人の祈り、教会の集会への出席、戒めを守ること、予言者の勧告に従うこと、セミナーやインスティテュートへの出席などを通して達成されるのです。

またそれは、家庭で共に聖典を読み、定期的に家族の祈りを捧げ、家庭の夕べを開くことによって、そして言葉だけでなく、行ないによって繰り返し証を伝えることによって成し遂げられます。

私たちが皆、賢明な者となり、主のメッセージに耳を傾け、主が言われることを行なえますようにお祈りいたします。□

大管長会, 新たな幹部を召す

七十人定員会の増員

大管長会は、七十人第二定員会会員として新たに15人の教会幹部を召したと発表した。さらに、4人の七十人第二定員会会員が、七十人第一定員会会員に召された。

この教会幹部の増員は、今年10月の総大会で何人かの七十人が名誉教会幹部となるのを受けて行なわれた。加え

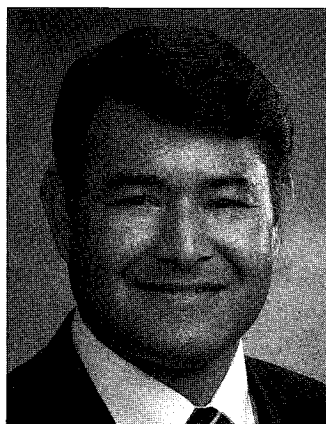
て、メキシコで新たな地域会長会が必要になるためである。現在のメキシコ地域は; 近い将来、モンテレーを中心とするメキシコ北部地域と、メキシコシティに本部を置くメキシコ南部地域に分割される予定である。

七十人第一定員会会員に召された4人の教会幹部は次のとおり。カーロ

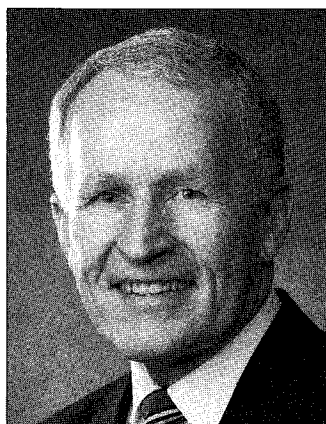
ス・H・アマーゾー長老。グアテマラ出身、中央アメリカ地域会長会第一副会長。ベンジャミン・B・バンクス長老。ユタ州ムーリー出身、太平洋地域会長会の一員を経て、現在北アメリカ南東地域会長会第一副会長。スペンサー・J・コンディー長老。アイダホ州プレストン出身、現在ヨーロッパ・地中海地域会長会会長。ロバート・K・デレンバック長老。ユタ州ソルトレークシティ出身、中央若い男性会長会第一副会長および北アメリカ北東部地域会長会第二副会長。

七十人第二定員会会員に召された新たな教会幹部は次のとおり。リノ・アルバレス長老。メキシコシティ出身、現在メキシコの教会教育部部長。ダラ

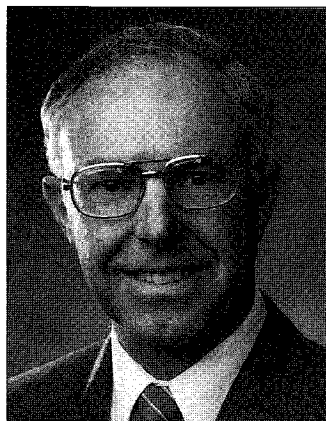
4人の七十人第二定員会会員, 第一定員会へ



カーロス・H・アマーゾー長老



ベンジャミン・B・バンクス長老

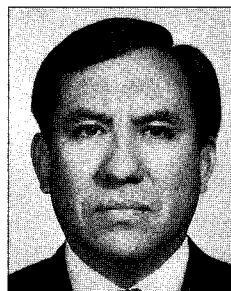


スペンサー・J・コンディー長老

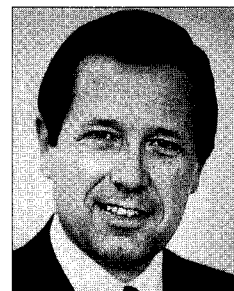


ロバート・K・デレンバック長老

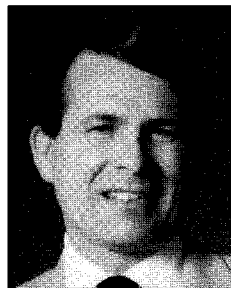
15人の新たな



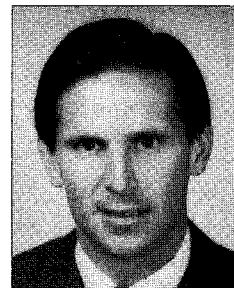
リノ・アルバレス長老



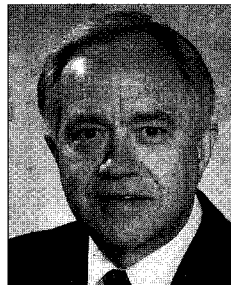
ダラス・N・アーチボルド長老



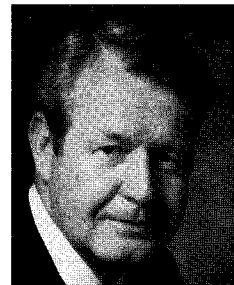
ジョン・B・ディクソン長老



ジョン・E・フォーラー長老



V・ダラス・メリル長老

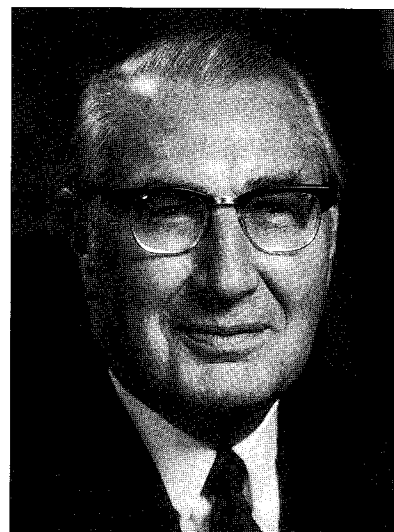


デビッド・ソレンセン長老

ス・N・アーチボルド長老。ブラジル・サンパウロ出身，会社重役。メリル・J・ベイトマン長老。ユタ州プロボ出身，経営コンサルタント。C・マックス・コールドウェル長老。ユタ州スプリングビル出身，ブリガム・ヤング大学宗教学教授。ゲーリー・J・コールマン長老。ユタ州プレザントビュー出身，ユタ州オグデンにあるウェーバー州立大学付属LDSインスティテュート副部長。ジョン・B・ディクソン長老。ワシントン州アーリントン出身，材木会社取締役。ジョン・E・フォーラー長老。ユタ州サンディー出身，公認会計士。ジェイ・E・ジェンセン長老。ユタ州オレム出身，教会教科課程管理部職員。アウグスト・A・リム

長老。フィリピン・マニラ出身，弁護士，現在フィリピン・ナガ伝道部伝道部長。ジョン・M・マドセン長老。ユタ州サンディー出身，ブリガム・ヤング大学教授。V・ダラス・メリル長老。ユタ州ムーリー出身，経営コンサルタント。デビッド・ソレンセン長老。ネバダ州ラスベガス出身，牧場主。F・デビッド・スタンレー長老。ユタ州ソルトレークシティ出身，建築設計会社取締役，現在アイダホ州ボイシ伝道部伝道部長。戴國源長老。香港出身，貿易業，現在香港伝道部伝道部長。ローウェル・D・ウッド長老。ユタ州センタービル出身，フィリピン・ミクロネシア地域監督。（「チャーチニュース」1992年6月6日付）

元管理監督， 逝去



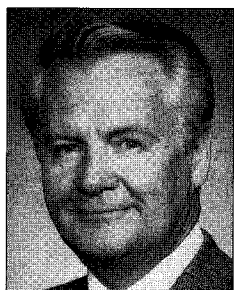
名 誉教会幹部のジョン・H・バンデンバーグ長老が，1992年6月3日，老衰のためユタ州サンディーの病院で死去した。享年87歳であった。バンデンバーグ長老は教会の管理監督を11年務めた後，1972年に十二使徒評議員会補助に召された。1976年には，七十人第一定員会会員に召され，2年後の1978年には名誉教会幹部となった。管理監督に召される前は教会建築委員会の副委員長を6年間務めた。

バンデンバーグ長老はユタ州オグデンに生まれ，青年時代にはオランダで専任宣教師として働き，後にステーク部副伝道部長，およびコロラド州とユタ州では副ステーク部長の責任を果たした。

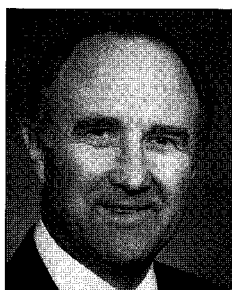
教会幹部に召される前，バンデンバーグ長老はコロラド州で織物製造や牧場経営に携わり，中でも羊毛や家畜の取り引きに従事した。

遺族には，妻のアリーナ・ストック・バンデンバーグ姉妹とふたりの娘，11人の孫，そして10人のひ孫がいる。（「チャーチニュース」1992年6月6日付）

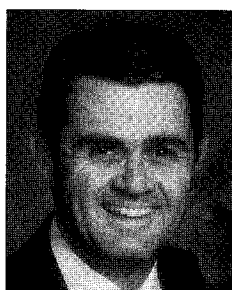
教会幹部召される



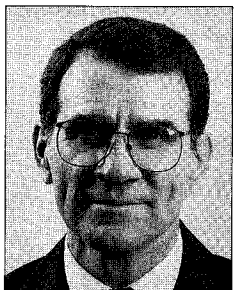
メリル・J・ベイトマン長老



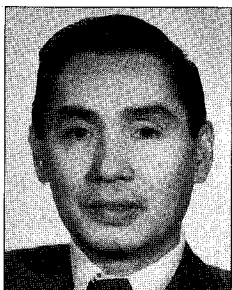
C・マックス・コールドウェル長老



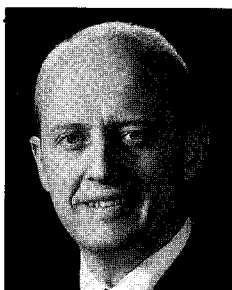
ゲーリー・J・コールマン長老



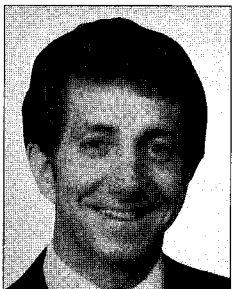
ジェイ・E・ジェンセン長老



アウグスト・A・リム長老



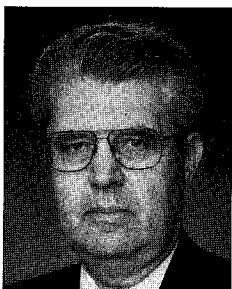
ジョン・M・マドセン長老



F・デビッド・スタンレー長老



戴國源長老



ローウェル・D・ウッド長老

暴動の被害地に 差し伸べられる友情の手

教会員、ボランティアに加わって救援活動

カリフォルニア州ロサンゼルス発

カリフォルニア州ロサンゼルスで起こった暴動の火は消えたが、教会員を含む多くの人々による奉仕のともじりは、今も赤々と燃え続けている。

5月8日、七十人第一委員会会員のジャック・H・ゴーズリンド長老は被害地を訪れ、ボランティアに加わって、この悲しむべき暴動後の救援活動や復旧作業に携わるロサンゼルス地区のステーキ部の教会員に賛辞を贈った。

北アメリカ西部地域会長会の一員でもあるゴーズリンド長老は次のように述べている。「教会員は自分たちの隣人に関心を寄せていたので、素早い対応ができました。彼らは人々に抱いている愛と思いやりから援助をしたので

す。」

援助の対象となったのは、ロサンゼルス・サウスセントラル地区とその周辺地域での3日間に及ぶ暴動中に、店や家屋が略奪や放火に遭った人々である。この暴動は、4月29日、自動車を運転していた黒人のロドニー・キング氏を殴打したロサンゼルス警察の4人の警官が、地裁陪審で無罪の評決を受けた直後に発生した。死者はおよそ55人、負傷者は2,300人を超えた。被害総額は推定7億1,700万ドルに上る。

教会員では少なくとも8人が商品の略奪や火災の被害を被り、3人が負傷した。（「チャーチニュース」1992年5月9日付参照）

ゴーズリンド長老と妻のグウェン姉



暴動後の復旧について、最善策を話し合うジャック・H・ゴーズリンド長老とロサンゼルス韓国街の地元の教会指導者。

妹は、カリフォルニア州フットヒル・アンド・グレンデール地区のジェームズ・B・ジェイコブソン地区代表、ロサンゼルス第2支部（韓国人支部）のスー・ヤン・キム支部長、およびカリフォルニア州の教会渉外部門ディレクター、キース・アトキンソン兄弟に案内されて被害地を視察した。

アトキンソン兄弟によれば、ゴーズリンド長老が訪れた地域は、末日聖徒のふたつの韓国人支部がある韓国人街、暴動の発生地であるロサンゼルス・サウスセントラル地区、ハリウッドに近接する、暴動の余波を受けた一部の地区、および南カリフォルニア大学周辺である。またゴーズリンド長老は、東洋伝道教会という韓国人街のキリスト教センターも訪れた。ここでは暴動の被害者に救援物資の配給が行なわれている。

ゴーズリンド長老は、チャーチニュース記者に対してこう語った。「地区の大半を車で回りました。まず被害の程度を把握し、事態をこの目で見て、教会員の安否を確かめるためでした。また被害地の人々に、教会にどんな助けができるかを検討する目的もありました。」

長老は現場の様相にショックを受けたと言う。「建物という建物が焼け落ちているのを目にし、信じられない気がしました。あの場に立った時の緊迫感は相当なものでした。街中に武装したガードマンや兵士、警官がいました。店を失った人たちの表情を見た時は、がく然としました。」

北アメリカ西部地域会長会会長である七十人第一委員会会員のジョン・H・グローバーク長老は、末日聖徒であるか否かにかかわらず、被害地住民全体の救援方法を検討するため、教会が委員会を設置したことを明らかにした。同委員会はロサンゼルス地区の地区代表およびステーキ部長で構成され、教会福祉事業部の担当者と協力して働くことになる。

一方、ロサンゼルス地域の教会員も隣人への援助を続けており、末日聖徒のステーキ部から寄付される食料品や日用品が、トラックで次々と配給施設に到着している。物資を収集、寄付し

ているのは、主として、ロサンゼルス、サンタモニカ、グレンドローラ、ハシエンダハイツ、チノ、パーロスベルデス・ノースハリウッド、トランスノース、ハンチントンパーク、ニューバリーパークの各ステーク部に所属する教会員である。

グレンドローラスターキ部およびハシエンダハイツスターキ部の教会員はさらに、それぞれ2,500ドル、2,800ドルを救援活動に寄付したと、アトキンソン兄弟は述べている。

そのほかの活動として、近隣のコロナスターキ部の教会員は、地元の教会が被害者に食事を提供するのを手伝っている。またロサンゼルス第1ワード部、および南カリフォルニア大学ワード部の末日聖徒はサウスセントラル地区の落書きを消し、同地区の教会での食料の荷分け作業と配給に協力している。

宣教師も救援活動に参加している。カリフォルニア・ロサンゼルス伝道部の伝道部長補佐デニス・S・メア長老は、同伝道部からふたり、隣接するカリフォルニア・アーケディア伝道部から4人、計6人の韓国語を話せる宣教師が、韓国人街の住民が保険の申請書などの提出書類を記入する手伝いをしていると述べた。彼らはまたサンタモニカスターキ部から届いた食料を韓国人地域の被害者に配給するため、配給施設への搬入にも協力した。

メア長老はまた、地元の高校周辺の落書きされた壁の塗装に、10人の宣教師が加わったと語っている。

暴動後1週間が経過したころ、多くの地域で水道水が多量の塩素によって汚染された。メア長老によると、ロサンゼルス神殿訪問者センターの姉妹宣教師を含む8人から10人の宣教師は、ロサンゼルス中心部に飲料水の入った容器を配る赤十字の活動を手伝った。

暴動の影響を受けた地域での救援活動は、当分続くものと思われる。「教会員は、奉仕の機会として今後もこれらの活動を続けていこう」とロサンゼルスの教会指導者たちは語っている。——ジュリー・A・ドクスタダー（「チャーチニューズ」1992年5月23日付）

「タイム」誌で紹介されたユタ州

以下に紹介する記事は米国「タイム」誌に掲載されたものである。

多言語の州

モルモン教の宣教師により、ユタ州は全米一の多言語地域に。おかげでビジネスも大繁盛。

サリー・B・ドンリー
ソルトレークシティ

伝説のパベルの塔の建設者がユタ州から労働者を雇っていたら、言葉の混乱で失敗するどころか、塔を完成させてしまっただろう。様々な言語能力を持つユタ州の人々は、ハチのように勤勉に働いたに違いない。少なくとも、近年語学力を駆使して出身州の経済を打ち立てようとする人々はそう自負している。

人口も少なく、陸地に囲まれた砂漠と山、荒野がしま状に広がるアメリカ西部の典型的な地形のユタ州には、世界の文字言語の90パーセントにも及ぶ多くの言語を話す能力を持つ人々がいる。「電話をして30分もすれば、外国語を話せる人が見つけられますよ。人口が200万人ほどの州にしては驚くべきことですね。」地元の商工会議所会頭として頻繁に外国からの客人の接待に当たるフレッド・ボール氏はこう語る。ユタ州は全米で最も言語の多様化している地域で、これを利用して国際ビジネスの誘致に取り組んでおり、旅行者の歓迎ムードも高まっている。パークシティやディアバレーの国際スキーリゾートでは、英語と日本語の両方の表示板が掲げられており、州はその語学力をキャンペーンの一環として2002年の冬期オリンピックの主催地候補に名乗りを挙げている。

この多言語を駆使する能力は、ソルトレークシティに本拠を置くモルモン教会(正式には末日聖徒イエス・キ

リスト教会)の伝道活動に端を発している。この教会は毎年何千人もの若者(少数の女性も含めて)を世界中に送り出している。彼らは少なくとも2年間(訳注—原文どおり)、割り当てられた地域で土地の人々と共に生活しながら、モルモンの教を宣べ伝える。会員は全世界で800万人に上り、現在95カ国、26属領地で4万4,500人の宣教師が働いている。(訳注—統計数値は原文のまま)

彼らはまず、プロボにある宣教師訓練センターに入る。ここでは一時に3,000人を教育することができる。エストニア語、タヒチ語、アイスランド語などの少数言語も含めてアルメニア語からベトナム語まで38に及ぶ言語が、かつて宣教師だった人や、近隣の大学に通う外国人学生によって教えられている。モルモン教会の経営するブリガム・ヤング大学では、2万8,000人の学生のうち60パーセントが外国語の豊富な習得経験を持つ。

ユタ州の豊かな語学環境により、いくつもの国の企業が州内に支社を開くことになった。近年ヨーロッパ、アジアの35都市にラインを広げる、アトランタを拠点とするデルタ航空は、国際予約センターをソルトレークシティにオープンし、ヒンズー語、スウェーデン語を含む13言語で予約を受け付けている。アメリカン・エクスプレス社は数年前、世界規模のトラベラーズチェック・サービスセンターをソルトレークシティに置くことを決定した。4階建てのガラスとコンクリートの建物の外観はほかの近代的なオフィスビルと何ら変わらないが、その中は、いわばディズニールランドの「イッツ・ア・スモール・ワールド」といった雰囲気だ。1,500人の従業員の半数が2言語使用者で、可能な言語は118に及ぶ。「旅行者はだれでも感じることで

新たに組織された 福井地方部、石川地方部

すが、むずかしい問題にあったとき、言葉がわからないというのはいやなもの。電話の相手が言葉がわかるのを知って、お客様は安心されるようです。」スペイン語を話すユタ州立大学の学生でオペレーターとして働くロナ・ドレーパーはこう語る。

ユタ州のこうした才能の蓄積は、地元のビジネスをよりグローバルに拡大する機会を提供している。ブリガム・ヤング大学が1980年にリサーチプログラムとして始めた翻訳会社「アルプネット(ALPNET)」は世界各地に22のオフィスと250人の従業員を有する2,600万ドル企業に成長した。ソルトレークシティが先端技術の発信基地としても伸びてきたことにより、コンピュータを使った翻訳が自然と一般の労働者にも浸透してきた。「言語的、文化的に意識の高い社会でありながらコンピュータも駆使できるという、ユニークな取り合わせです。」アルプネット社長トーマス・シール氏はそう語る。会社の取り引き相手としては、アップル・コンピュータ社、ブリティッシュ石油、NATO(北大西洋条約機構)、シーメンス社などがある。最近では、米軍からサウジ軍向けに装甲車に関する3万2,000ページにわたる資料をアラビア語に翻訳する依頼があったという。

ブリュッセルから東京まで各地に支部を持つ、ユタ州の経済開発機関の役員は、ユタ州の公立高校の生徒の60パーセントが外国語を学んでいると指摘している。また同州はその語学力を前面に押し出して、国際的に工場、事務所の誘致に成功している。

その一例として、昨年、台湾を基盤として活動しているコンピュータ会社コンベック・マニュファクチャリング社は、初の海外プラント地をユタ州に決めた。コンベック社の重役たちはユタ州の人々が広東語を話せるだけでなく、台湾の会社の習慣や文化にも理解を示すことに心を動かされたのだ。こうした事例から考えても、この地球規模で広がる経済の中にあつてユタ州の人々の多言語能力は、言語以上のことを語っているようだ。—From TIME Magazine. © 1992 TIME, Inc.

去る4月19日に開催された北陸地方部大会で地方部の分割が支持され、新たに福井地方部と石川地方部が組織されました。これに伴い福元隆司^{ふくもとたかし}地方部長が解任され、新たに福井地方部^{たけがわまもろ}地方部長として竹沢護^{たけがわまもろ}兄弟、第一副地方部長として野崎史郎^{のざきしろう}兄弟、第二副地方部長としてチャールズ・B・ラブディー^{やまのたけゆき}兄弟、また石川地方部^{おおたひでのり}地方部長として徳沢清^{おおたひでのり}兄弟、第一副地方部長として山野武幸^{おおたひでのり}兄弟、第二副地方部長として太田秀典^{おおたひでのり}兄弟が召され、その任に当たります。

福井地方部

感謝の心で

福井地方部地方部長
竹沢 護

16年前、父親はすでに他界し、私は母親とふたりで暮らしていました。母親は以前癌^{がん}の手術を受け、病弱の身でしたが、恐れていた癌が再発しました。あと半年の命と主治医より言われ、泣き暮らしていましたが、私が最後にできることといえば、病院に泊まり込み看病することでした。昼は会社、夜は病院の生活が続きました。夜は祈るような気持ちで過ごしました。日に日に痛み止めの注射が増えていき、手立てもなく母は亡くなりました。その母よりいつも聞かされていたのは、「あなたは感謝する心がない」という言葉でした。

当時の私は、福音も知らず、自分だけを信じ、自己中心主義の孤独な人間で、母親の言葉など、とても理解できませんでした。そのころ義兄の紹介で、お見合いの話がありました。何回か会っていくうちに彼女はすでに教会員であるとわかり、教会のことを話してきました。私は宗教は個人の自由だから

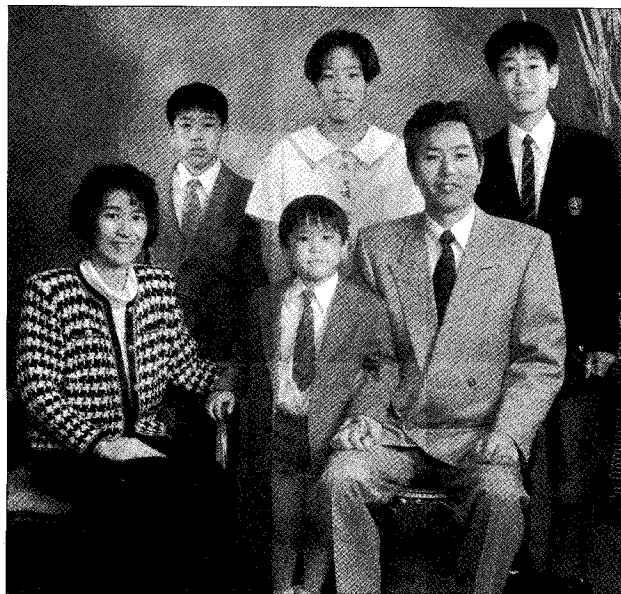
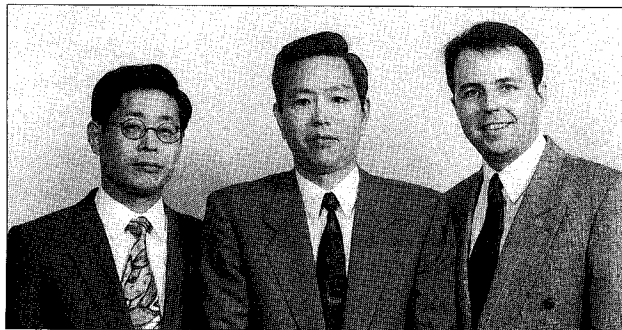
別に構わないと言いました。しばらくすると彼女は教会に一度来てほしいと言いました。一瞬しりごみしましたが、一度だけならと思って教会に行ってみました。古い民家を改造した教会で、その時は何も感じませんでした。そうしているうちに結婚の話がまとまり、私たちは結婚しました。後で妻から聞いたのですが、彼女も結婚のことで非常に悩んでいたそうです。毎晩のように自分の家の屋上で神様に祈っていたそうです。

私たちの結婚生活が始まりました。日曜日になると妻は教会に出かけていきました。そしてときどき教会のことを話してくれました。

いろいろ聞いているうちに、両親を亡くし、家族もふたり兄弟で少なく、職場の人間関係で悩み、人生に疑問を感じていたころでしたので、私にも福音が必要であると思いました。そして最初の子供が生まれたら、宣教師から福音を学ぶ約束をしました。

宣教師はアパートから私の家まで自転車で約30分の道のりを、雨の日も約束の日には必ずやって来ました。ある日祈りについて教えてくれました。「天のお父様、感謝します。」この時、私にはまだ天の父や母がいることを知って非常に心強く感じ、喜びました。そして母親から言われていた感謝の意味も、少し理解できるようになりました。集会も回を重ね、私にとって戒め

写真上——福井地方
部地方部長会、左か
ら野崎史郎第一副地
方部長、竹沢護地方
部長、チャールズ・
B・ラブディー第二
副地方部長
写真下——竹沢護地
方部長ご家族



で一番の問題となったのは、10年来の
んできたたばこでした。

なかなか決心がつかず、そうこうす
るうちにひとつの大きな試練に直面し
ました。車での人身事故でした。この
事故をきっかけに、福音を受け入れる
のを引き延ばしていた私も、神様を求
める気持ちが強くなり、バプテスマを
受けることができました。この試練も
神様の助けと、妻の助けによって耐え
ることができました。「神は……あな
たがたを耐えられないような試練に会
わせることはない」のです。(Iコリ
ント10:13)

それからの信仰生活にはそれまでに
経験したことの無い喜びがたくさんあ
りました。自分の弱点を素直に認める
ことができ、職場の人々に対して気持
ちよく、明るく接することができま
した。また仕事上の改善もたくさんで
きました。それまで自分の性格は変わ
らなと思っていましたが、今では福音
は人の性格までも変えることができ
ると証できます。それから1年後、私た

ち家族は東京神殿で、すべての儀式を
受けることができました。

福音を教えてくださいました宣教師や、
妻に感謝しています。結婚して14年の
月日が流れ、4人の子供に恵まれました。
その間に支部長や副地方部長など
様々な経験もさせていただきました。
そしてこのたび、取るに足らない私で
すが、このような大きな召しをいただき
ました。

私はいつも召しを受けるとき、スペ
ンサー・W・キンボール大管長の言葉
を思い出します。神様に感謝の気持ち
を示すことは、「奉仕活動、家族の祈
り、什分の一を納める、その他神が期
待しておられる種々の方法で示すこ
と」です。(「赦しの奇跡」p.64)私に
与えられた召しを喜びをもってお受け
し、これからも主のみ業に励みたいと
思います。「およそすべてを感謝して
受くる者には栄光を与えられん。しか
して、この世のものもまた彼に加えられる
ことすなわち百倍よりも多からん。」
(教義と聖約78:19)□

石川地方部

モルモン経から 得た信仰

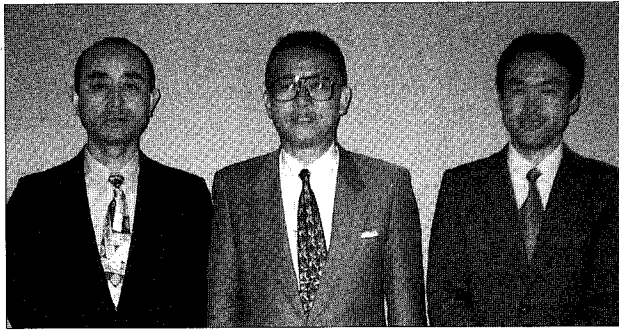
石川地方部地方部長
徳沢 清

この教会を私が知ったのは、銀行
に就職して2年目の1960年の4
月でした。外人の宣教師による英会話
教室に行き、宣教師から福音を学ぶよ
うになりましたが、唯物論者で無神論
者の私には、その教えはあまり興味
が持てませんでした。しかし、その教
えの中でひとつ、人間は死んでも必ず
復活して永遠に生きることができると
いうことに、大変驚くと同時に、それ
がもし本当ならば素晴らしいことだ
と思いました。なぜならば、私は時折、
絶対に訪れる死というものを真剣に考
えていると、自分が奈落の底に落ちて
いくような恐怖感に悩まされていたか
らです。

そのころ私は哲学書や仏典の中から
真に生きるべき姿を求めて彷徨してい
ましたが、酒とたばこに縛られた放縱、
乱脈な生活におぼれていましたので、
そのような生活から脱出したいとの願
望もあって、宣教師の勧めるモルモン
経をだまされたと思って一度読んでみ
ようと決心しました。ところが、読ん
でいくうちにその面白さに引きずり込
まれ、仕事から帰ると食事以外は無我
夢中で読み続けました。これまでたび
たび経験した哲学書や仏典の中の矛盾
やむなしさは正反対の、完璧さと真理
に遭遇した喜びを忘れることができ
ません。私は、この本は人間が創作し
てできるものではない、神が予言者
を通して書かれた本としか思えないと確
信したのです。

こうして私はその年の8月28日、犀
川の上流で兄弟姉妹の見守る中、宣
教師からバプテスマを受けました。水
から上がった時、目に見える物がすべて
新鮮で明るく輝いて見え、私のこれま

写真上——石川地方
部地方部長会、左か
ら山野武幸第一副地
方部長、徳沢清地方
部長、太田秀典第二
副地方部長
写真下——徳沢清地
方部長ご家族



での数々の罪が赦され、洗い清められたのを感じました。そして、あの死に対する恐怖心も去っていきました。しかし現実には厳しく、父母や3人の姉妹たちから猛反対され、家族の中ではいつも孤立していました。父とは通常は比較的良好な関係でしたが、こと教会に話が及ぶと、3年前に亡くなるまで、お前は先祖代々の仏教徒の家でただひとりの異端者であり、親不幸者である

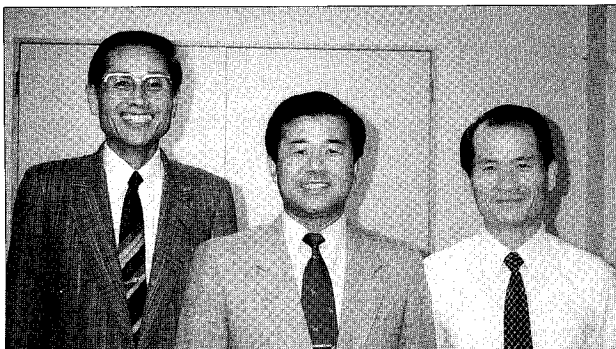
と言って責められました。

昨年東京神殿で、私は父の身代わりのバプテスマを受けることができました。霊界での父は必ずや私を理解し、今では喜んでくれていると信じています。結婚13年目に妻もふたりの子供たちと一緒にバプテスマを受け、現在5人の息子に恵まれています。長男は伝道から帰還後神殿結婚し、現在ふたりの子供の父親として東京の中野ワード

部で副監督の責任をいただいております。次男は2年前伝道を終え、この5月に神殿結婚をし、このほど金沢支部の副支部長に召されました。四男は今年3月、大学を2年で休学し、現在大阪伝道部で元気に伝道しています。

私は福音を通して永遠の人生、家族の大切さを学びました。そして、私に不足している謙遜、柔和、忍耐、寛容、愛などの徳をいつも求め続けていくことを願っております。「私はあなたたちが謙遜、従順、柔和であって容易に勧告に従い、忍耐強くてよく勘忍し、何事にもひかえ目であっていつも神の命令を熱心に守り……。」(アルマ7:23)私は妻の長所から、私に不足している多くのことを学びました。ことに15年間に及ぶ重度身障者へのボランティア活動、13年間の「金沢こころの電話」ボランティア活動、教会に反対されてきたにもかかわらず、心の葛藤と戦いながらの妻の老母に対する奉仕などから、そこに他人に対する慈愛の尊さを学びました。私はこうした妻を心から尊敬しています。私は今回の地方部長の召しは、私の弱点、短所を克服するために、神様がチャレンジを与えてくださったのだと思っております。いつも謙遜と柔和、慈愛を心がけ、5つの支部とそこに集う会員一人一人のために全力で奉仕していく決意しております。最後に天父とイエス・キリストが生きておられること、イエス・キリストが救い主、贖い主であること、末日聖徒イエス・キリスト教会が地上の唯一まことの教会であることを証いたします。□

再組織された鹿児島地方部地方部長会



去る4月26日、福岡伝道部のシリアル・岩村・アモロゾ・フィゲレス伝道部長管理の下に開催された鹿児島地方部大会において、地方部長の責任を果たしてこられた大庭一廣兄弟が解任され、新たに永友裕兄弟(写真中央)が召されました。第一副地方部長には北川國治兄弟(写真左)が、第二副地方部長には黒木三千夫兄弟(写真右)が召され、その任に当たります。

召しにこたえて

鹿児島地方部地方部長
永友 裕

クリスチャンの高校に入学し、初めてイエス・キリストの福音に接した私は、学校で教える神父の教えと行ないが一致していなかったことに疑問を持ち、本当の教会がほかにあるのではないかと思うようになりました。そのころ、ある教会で働いていた、いとこの紹介でその教会にも行ってみましたが、そこでも満足できるものはありませんでした。その後もいろいろな教会へ足を運びましたが、どれも私が求めている真の教会ではありませんでした。

その後大学受験に失敗した私は、福岡で浪人生活を送ることになりました。学資を稼ぐために新聞配達をしていた時、ある日の新聞の投稿欄に、この教会の宣教師が「世の中の乱れ」について投稿しているのを見つけました。その当時、この世の中にはもう真実の教会はないと思っていた私は、そのメッセージに強く心を打たれました。そしてすぐにその長老に手紙を書きました。しかし彼はすでに転任しており、代わりにふたりの宣教師が来てくださいました。彼らがジョセフ・スミスについて証をした時、心の中で求めていた教会に出会うことができたと感じました。その時にモルモン経をいただきましたが、受験勉強が忙しく、少し目を通してただけでした。

翌年に鹿児島大学に入学した私は、すぐに教会を捜しました。すると、下宿から300メートル足らずの所に教会があることがわかり、宣教師にバプテスマを受けたいと申し出ました。そして福音を学び、教会員となった私はモルモン経を熱心に読み、モロナイ書第10章3—4節が本当かどうか答えを受けたいと思い、答えを受けるまで何時間も祈りました。その結果、「モーサヤ書第4章」という文字が目の前にはっきりと示され、そこを読んだ時、自分の行なうべき事柄が全部そこに示さ

れていたことを知って、この教会が真実であるという強い確信を得ることができました。

教会員になって数カ月間の生活の中で、奇跡と思われる事柄が私の身に起こりました。自己中心的にしか物事を考えられなかった私が、イエス・キリストの福音を学ぶことによって、周りの人々を思いやる心を身につけていったのです。主が本当に生きておられることを知り、いつも新鮮なものを受け喜びを得て、自分の心や考え方が変わっていくという喜びを感じました。

大学卒業2日後に現在の妻、愛する栄子姉妹と結婚し、ふたりで福音を土台とした生活を送れるよう努力を続けました。そして1年半後に鹿児島地方部長の召しをいただいた時、若輩の私にこの責任が果たせるのかと悩みました。その時、出エジプト第4章でモーセが主に、「ああ主よ、……わたしは口も重く、舌も重いのです。……どうか、ほかの適当な人をおつかわしてください」(10、13節)と言ったのに対し、「だれが人に口を授けたのか。……それゆえ行きなさい。わたしはあなたの口と共にあって、あなたの言うべきことを教えるであろう」(11—12節)と言われた主の答えを読んで、その召しを受ける決心がつかしました。

教職に就いた私は、その後鹿児島から宮崎に移り、2度目の地方部長の召しをいただき、5年半務めさせていただきました。私たちに子供がいませんので、仕事以外の時はいつも妻と一

緒に行動し、妻の大きな助けによってこの責任を果たすことができました。

その後3年間、アルゼンチンのブエノスアイレス日本人学校で働くことになりました。教会もあり、神殿もある国に導いてくださいとのそれまでの祈りがこたえられ、日本では遠くて年に2、3回しか行けなかった神殿にも毎週参入でき、儀式執行者として奉仕する機会もあり、有意義な信仰生活を送ることができました。地方ではなかなか会うことのできない教会幹部の方々とも親しく交流を持たせていただき、彼らの模範から謙遜さ、積極的に主のみ業を行なうことの大切さを学ぶことができました。日本から一番遠い、地球の裏側の国でしたが、イエス・キリストの福音で結ばれている会員は、どこでもひとつであると感じました。

今度3度目の地方部長としての召しを謙遜な気持ちで受け止めています。トーマス・S・モンソン長老が「謙遜な祈り、たゆまぬ準備、そして信仰あつい奉仕を通して、私たちは自分に与えられた神聖な召しを果たすことができます」(『奉仕の召し』『聖徒の道』1992年1月号、p.54)と言われた言葉どおりに鹿児島地方部のために頑張りたいと思います。謙遜な気持ちと同時に積極的な態度で何事にも取り組んでいきたいと思っています。

主が確かに生きておられ、この末日聖徒イエス・キリスト教会が神様の真の教会であることを証します。□



永友裕地方部長
ご夫妻

汝らの家族は健在なり

(教義と聖約100：1)

東京南伝道部専任宣教師

小野 健

イエス・キリストの証し人として働く機会に心から感謝しています。19歳の時、友人に連れられて教会の門をくぐり、数カ月後にバプテスマを受けました。以来、宣教師になりたいという望みは絶えることはありませんでした。大学を卒業し、社会人となって自分の信仰や証が成熟していくのを感じるにつれ、ますます伝道に対する思いは強まっていきました。たびたび断食して祈り、指導者との面接を通して意を決した私は、会社を辞め、両親を再度説得して伝道に出ました。多くの障害もありましたが、今こうして宣教師になることができ、本当に主の助けに感謝しています。

昨年任地に来て間もなく、以前から決して健康とは言えなかった母の体調が悪化しました。父から電話や手紙が来るたびに、心は重くなっていきます。伝道について口を開くたびに烈火のごとく私をしかっていた母が、いよいよ私の旅立つ時になって、涙を浮かべながら笑顔で「頑張ってきたさいよ」と見送ってくれた姿が何度も思い出されました。ただただ主のみ力にすがることしかできず、毎日懸命に働いたつもりです。

そんな中で、ある準備の日の早朝、「家に電話をしなさい」という、強いみたまの導きを感じました。「私は宣教師であるのに……」といったんは打ち消そうとしましたが、どうしても否定することができずにダイヤルを回してしまいました。すると、父がいきなり「だれかから聞いたのか？」と尋ねました。「えっ、どうして？ 何かあったの？」「うん……お母さんはあさって手術をするんだよ。」子宮筋腫きんしゅという病名を聞いても私にはよくわからず、「取ってしまえば大丈夫なんだから」という母の言葉も気休めにしか聞こえませんでした。

2日後の手術の日は、宣教師大会がありました。私は断食をして、イエス・キリストの力によって少しでも母の苦しみが和らげられるように、と祈りました。ウィリアム・ラッセル・ワーカー伝道部長にも事情を説明し、導きを求めました。伝道部長はやさしい目でじっと私を見つめ、「小野長老、あなたには強い信仰がありますから何も心配はいりませんよ」と言って抱き締めてくださいました。私にはまさしく天父が私を抱き締めてくださっているように思えてなりません。みたまによって、母が主のみ手の内にあることをはっきりと知ることができたのです。私の中の不安は一遍になくなり、心は喜びに満たされ、断食を解いて午後の大会に臨みました。

数日後、母から、また病院に母を見舞ってくれた姉妹宣教師から相次いで手紙が届き、奇跡しじょうが起こったことを知りました。母の腫瘍は、入院先の病院の記録の中でも3番目に大きいもので、手術も長引き大変だったようです。それにもかかわらず手術は成功し、手術後の経過も順調でした。母の手紙にはこう書いてありました。「麻酔が切れた時、皆痛み止めの注射を何本も打つのですが、私はほとんど痛みもなく、先生もびっくりされました。私自身も不思議な気がしますが、健が祈ってくれたからかな、と今に思えばそんな気が



小野健長老(右)

がします。教会の人にも話をしたら、本当にそうだと言っていました。」

姉妹宣教師の手紙にはこうありました。「5月22日にお母さんのお見舞いに行きました。……その日、お母さんは、涙と共にすばらしい証をしてくださいました。とても感動しました。

同じ病気で手術した人は、麻酔が切れた後、痛くて何回も注射を打ってもらい大変だったそうですが、お母さんはその人よりも病状がひどかったにもかかわらず、麻酔が切れても全然痛みがなかったそうです。看護婦さんとも不思議がって、『小野さん、遠慮しないでちゃんと教えてください。我慢強いですね』と、痛くないことをなかなか信じてくれなかったそうです。お母さんは、涙をぬぐいながら『それは、健が私のために一生懸命祈ってくれているから……』と言っておられました。

小野長老が伝道に出たことに対して、もう心に何のわだかまりもないし、今自分がこうなったのも神様のみこころだろうとおっしゃっていました。」

長い間病弱だった母は、今では見違えるほど健康になり、職場でも昇進し、元気で仕事に励んでいます。また手紙や荷物を送って、私を励ましてくれています。

「汝らの家族は健在なり。」(教義と聖約100：1)「汝は先に家族のためにしばしば悩みたり。それにもかかわらず、われは汝と汝の家族に小さき見らに至るまで祝福を与えん。」(教義と聖約31：2)まさしく、主は宣教師とその家族を祝福してくださっています。

「愛する兄弟たちよ……イスラエルの聖者であるキリストのもとにきて、キリストの与えたもう救いと贖いの能力ちからを受け……全身全霊さきげものを捧物としてキリストに捧げ、断食と祈りとを常に怠らず、終りまで堪え忍べ。そうすれば、あなたたちの救われることは主が生きていますように確である。」(オムナイ1：26)イエス・キリストが生きておられ、私たちの救い主、贖い主であることを証いたします。(おの・けん 仙台ステーク部山形ワード部出身)

パソコン通信を通して広がる仲間

福岡ステーキ部北九州ワード部
土谷重幸

昨年5月25日土曜日、初夏を思わせる暑い日差しの中、パソコン通信(企業や家庭に設置されているパーソナルコンピュータ間のデータの交換を行なう通信)で知り合った末日聖徒が、東京神殿に集まりました。東京近辺からは厚木や八王子、千葉の兄弟やそのご家族、そして北九州からは私です。皆で午前10時のエンダウメントの儀式を受け、その後食事をしながらいろいろと話をしました。

私たちが知り合うきっかけになったのは、ある全国ネットのパソコン通信での電子掲示板でした。2年ほど前、横浜ステーキ部上大岡ワード部の求道者の方が、パソコン通信を通じて全国の末日聖徒に呼びかけてくれたのです。

それから1年の間に少しずつ輪が広がり、この日の私の上京する予定を知らせたところ、神殿で顔を合わせることになりました。日ごろパソコンやワープロを通じて連絡を取り合っていたものの、お互いに顔を合わせるの初めてで、提案した兄弟の締めていた蝶ネクタイを目印に、無事対面ができました。また、当日都合で出席できな

かったものの、メッセージを送ってくれた兄弟も何人かいました。ひとりの求道者の方のまいた種が、芽を出して確実に生長していき、対面という形でひとつの実を結んだのでした。

現在パソコン通信に参加している会員は約30人で、北は札幌市から南は北九州市に及んでいます。活動内容は、八王子のワード部で取った賛美歌に関するアンケートの結果を私のワード部で紹介したり、厚木から私のワード部に伝道に来ていた姉妹に支部からのメッセージを伝えたり、お互いのワード部やステーキ部の活動を紹介したりといったところです。パソコン通信のメリットは、送信する人も受信する人も自分の都合に合わせて通信ができるという点にあります。電話回線を通じて送るメッセージはどんな文章やデータでも即座にデータボックスに送信することができ、受信する人は自分のコンピュータを開いたときに、データボックスに書き込まれているメッセージを受け取る仕組みになっているからです。

昨年8月、発起人の求道者の方が同じワード部にいたパソコン通信仲間の

兄弟からバプテスマを受けました。2日後、儀式を施した兄弟からのメッセージが私たちのデータボックス(ID: NIFTY MHF00717, PC-VAN GBM71665)に書き込まれており、とても霊的な集会であったことが、その兄弟の感想とともにつづってありました。

現在このふたりの兄弟はそれぞれ別のワード部に移っています。ほかにも引越した人もいますが、住む場所や集う集会所が変わっても、パソコン通信なので距離の隔たりを感じずに、以前と同様連絡を取り合っています。

パソコン通信が教会員の中でどのような役割を果たせるかは、参加する兄弟姉妹のこれからの用い方にかかっていますが、アイデア次第では多くの可能性があると思います。今ではお休み会員の方、近くに教会のない所に引越された方、求道者の方などに対して、も少しずつですが、つながりを持てるようになってきています。

私は、このすばらしいメディアを正しい方法で利用していけば、必ず教会の活動の助けになると信じています。私自身この活動のつながりを通して、励まされ、勇気づけられ、証を得ることができています。確かにどこにいても信仰はひとつ、主の教えはひとつなのだとして強く実感することができています。これからも多くの兄弟姉妹とこの楽しい活動を分かち合えたらと願っています。(つちや・しげゆき 大祭司グループリーダー)



パソコン通信の仲間と
土谷重幸兄弟(右端)

大阪ステークス部^{せきめ}関目支部



私と扶助協会



竹下正子

大阪で万国博覧会が開催された1970年に、私は教会に導かれました。当時私は新潟に住んでいましたが、そこで伝道していた姉妹宣教師の「私は今とても幸福です」という言葉にひかれたのがきっかけでした。

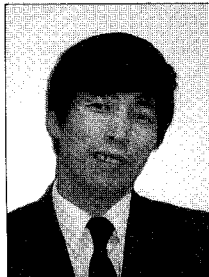
その姉妹宣教師は私がバプテスマを受けて間もなく転任していきました。心細さを感じなかったのは、新潟の姉妹たちのすばらしい笑顔のおかげでした。教会はビルの2階でした。彼女たちは、階段を上がった所でいつも握手をし、さわやかな笑顔で迎えてくれました。今、私は日曜日に何人の兄弟姉妹と握手しているだろうか少し反省しています。

扶助協会は初め何となく怖い感じでした。何もよくわからないのにむずかしい福音の勉強をしていたからです。それよりもM I A(現在の独身成人活動)が気楽に参加でき、楽しかったものでした。

そのころ、新潟支部では年1回、バザーを開いていました。姉妹たちは、うどんやカレーライス、そして特製のアップルパイ作りをしました。何日も前から準備をしたのです。このバザーを通して扶助協会に集う楽しさを覚えたと思います。家庭訪問も同僚に連れられて行きました。私の知らない、集会をお休みしている姉妹たちを訪問する道すがら、同僚といろいろ話をして親しくなりました。

新潟を離れて15年になりますが、今

完成した関目支部の教会堂



支部長
熊野均

関目支部(1991年11月4日、天満橋支部より名称変更)に私が初めて訪問したのは今から約9年前、大阪ステークスの高等評議員を務めていたときでした。天満橋支部が発足して少したったところで、人数も少なく、ステークス部長のメッセージを伝え、その家族的な雰囲気の中で食事をいただき帰った思い出があります。私自身は枚方ワード部に属していましたが、一度茨木ワード部に転出し、4年前現在住んでいる四條 畷市に引っ越して天満橋支部の境界内に移ったものの、最初はなじみの深い枚方ワード部に集ってました。ある日電話のベルが鳴り、以前から知り合いだった当時の上杉支部長に、定められた管轄地域のとおり

天満橋支部に転入してほしいと言われました。私は地元の指導者の言葉に従い、天満橋支部に移りました。

大阪市の市街地にビルの2階を借りて集会を開いていた天満橋支部は、近くに大阪城跡や造幣局があり、その北東へ約4キロ離れた関目にはすでに土地を購入してありました。転入してすぐ支部の指導者たちと「ぜひ教会堂を建てましょう」と話していると、やがて副支部長に召されました。その年から宣教師や会員の働きにより改宗者も増え、教会堂建築の申請をしました。翌年支部長に召され、教会堂建築に向けて全員で本格的に取り組み始めました。ところが一昨年、前支部長をはじめ多くの会員が転出し、出席人数が極端に減りました。残っている会員の中でも、家族や親族の病気で死などが重なり、集会に出席できない人もいました。けれども祝福されて、1991年1月15日には歎入れ式を迎え、人数も再び増えてきました。

これまで日本各地へ転出した天満橋支部時代の会員や、伝道を終えて帰還していった宣教師に本当に感謝しています。私たちはこれからも会員、宣教師共に力を合わせ、地元の人々に愛され、福音を広められるように頑張ります。(くまの・ひとし)

でもバプテスマを受けたばかりのころ、笑顔で迎えてくれた姉妹、パイ作りの上手な姉妹、家庭訪問の同僚など懐かしい姉妹たちに、新潟支部を訪問すると会えます。新潟は私の信仰のふるさとであり、また私の20年の信仰生活は扶助協会と共にあったと思います。

今、私は関目支部で扶助協会に集っています。大阪の夏は気温が高いうえに湿度も多く、沖縄よりも過ごしにくいと言われています。新しい教会堂が建つ前は、ビルの2階で、夏には扇風機が回っているにもかかわらず、噴き出す汗をふきながら、集会を開いたものでした。そんな夏を何度か数え、この地でもすばらしい姉妹たちに巡り会ってきました。扶助協会に集うとき、姉妹たちはひとつになります。主が扶助協会を導いてくださっているからです。たくさんのお祝福に感謝しています。

主が生きておられ、ベンソン大管長が教会の導き手であることを証します。(たけした・まさこ ステーク支部扶助協会教育担当副会長)

導きに従って



浜崎昇一

新しい教会堂、それは私たち関目支部の会員にとって待ち望んでいたものでした。1991年8月25日、それまで暑い中で汗をかきながら集会をしていた所と違い、冷房のよく効いた教会堂で献堂式が始まりました。W・ユージン・ハンセン長老の献堂の祈りを聞き、私たちの教会ができたのだという実感がわいてきました。

私がこの支部に初めて来たのは1989年2月でした。当時集会所はビルの2階にあり、車いすの私にとって十数段の階段は大きな障害でした。それまで

別の教会堂で福音を学んでいた私は、ここで迷いました。階段のない今までの教会に戻ろうかと。でも宣教師や兄弟たちの助けでこの教会で学び続けることができ、6月にバプテスマを受けました。

私がバプテスマを受けようと思ったのはもちろん宣教師の助けもありましたが、もうひとつの導きがあったからでもあります。それは自分がバプテスマを受ける夢を見たことです。この出来事があったバプテスマを受ける決心をしたのでした。バプテスマを受けたことで神様が近く感じられ、またたくさんのお祝福を得ることができました。

神様はいろいろな方法で私たちに導きを与えられます。祈りの中であったり、周りの人を通して教えられることもあり、また私のように夢の中で知らされるかもしれません。モルモン経の中ではリーハイも夢の中ですばらしい示現を見ました。鉄の棒の話です。私も神様から差し出される鉄の棒につかまって、神様の導きをいつも受けることができるように備えたいと思っています。

新しい教会堂には以前と同じように2階まで階段があります。そして同じように兄弟姉妹の助けによって、私は礼拝堂までの階段を持ち上げて運んでもらっています。(今では姉妹たちも力を合わせて手伝ってくれています)神様はいつか必ず良い方法でこの問題を解決してくださると信じています。(はまざき・しょういち 支部書記)

すばらしい導き



大和晃子

すべては偶然から始まりました。しかも、この言葉で片付けてし

まうにはあまりにもすばらしい偶然でした。

2年ほど前、私はこれといって不足するものもなく、ごく平凡な日々を送っていたにもかかわらず、何か大切な物を忘れていたような不安が日増しに募っていました。その不安が何なのか気づくまで、それほど時間を必要としませんでした。それからの人生で歩むべき指針を必要としていたのです。私は多くの人に助言を求めました。でもその答えのほとんどが、一時の安らぎは与えてくれるものの、真実を教えるはくれませんでした。そうしていつか、神様が、本当に全能の神様がおられるのなら、今もおられるのなら、私に真理を告げてくださるはずではないだろうか考えるようになりました。

そんな時でした。友人とふたりでのアメリカ旅行を思いついたのは。それもガイドブックを落として開いた所を気の向くままに訪れるという、今にして思えば恐ろしく無鉄砲な旅行でした。こうして一番初めに開いたのが、ソルトレークシティーだったのです。

テンプルスクウェアを訪れ、初めてモルモン経の存在を知りました。早速ガイドをしてくださった方に欲しい旨を伝えましたが、渡してはもらえませんでした。日本の連絡先を残しておけば宣教師がお持ちします、の一点張りなのです。変な宗教団体ではないかと不安でしたが、ジョセフ・スミスの受けた示現がもし本当だったらと思うとどうしても欲しくて、言われるままにしました。

帰国後、宣教師の訪問を待ちきれず、すぐに電話帳で調べ、教会に電話をしました。幸いにも教会が私の実家のごく近所だったので、その日の夕方に渡してもらうことになりました。その日はふたりの長老と神様について話し合い、本当に心が浮き上がるようなとても良い気持ちを感じ、翌日、大阪に帰りました。その後、モルモン経を開いたもののむずかしい言葉の多さに驚き、あまり読み進まないまま大切に引き出しの中にしまい込んでしまいました。

それから2カ月後でした。ふたりの宣教師が訪問してくれたのは。2週間後、バプテスマを受けました。

本当にすべては偶然から始まりました。いいえ、本当は主が私の必要としていた時、望んでいた時に、私を導いてくださったのです。私が主を知らないと言っていた時でさえ、主は常にその目を向け、その耳を傾けてくださっていたのです。私はただ、主の方へほんの少し手を差し出したにすぎないのに、主は計り知れない愛をもって、今、私を包んでくださっています。主は決してここから出て行けと言われるお方ではないことを知っています。すべては私次第です。

今、関目支部において、私にすべきことが与えられていることにとても感謝しています。何かの責任を与えられるとき、いつも主の愛と信頼を感じることができるので心からうれしく感じています。(やまと・あきこ ヤングシングルアダルト扶助協会代表)

試練の中で 得た信仰



佐々木夏枝

19 67年のある日曜日、子供たちを連れて散歩していると、ふたりの女の人がちらしをくれました。教会で英会話を教えているんだって、と話しながら歩いていると教会の前に来ていました。教会へ行ってみようか、ふっとそう思い、なんとなく教会の中に入っていました。少しお話を聞いて「次の日曜日にまたどうぞおいでください」と言われ、再び3人で出かけました。話の内容はあまりよくわかりませんが、また来てみたいと思う気持ちで家に帰りました。ところが、主人と主人の両親にうちは仏教だから、そんな所へ行くのはやめなさい、と

かられてしまい、行ってみたいと言うと、猛反対で、何を考えて今ごろそんなことを言い出すのか、と散々でした。

そのころ私は体調を悪くし毎日病院に通っていました。娘は中学校2年生で息子は小学校3年生でしたが、息子は脳性まひで、言語障害と知能障害、軽症の身体障害があり、府立の養護学校に通っていました。そのような試練のせいか、自分でも知らず知らず何かに救いを求めているのだと思います。でも皆に反対されるのでやっぱり行くのはやめよう、と思っていると次の日曜日、息子が「ママきょう教会に行く」と言い出しました。「早く行こう」とせかす息子に、義母も孫がそんなに行きたがっているのなら連れて行ってやったらと言ってくれました。

その次の週に私は肋膜炎で、子供に思いを残しながら入院しました。姉妹宣教師が聖書とモルモン経を持って、病院にお見舞いに来てくれました。読む時間があるので毎日ほとんどの時間を使い、4カ月以上かかって読みましたが、あまり理解することができませんでした。退院間近になって主人から、娘も息子も土曜日と日曜日はほとんど教会に行っている、いつもだれかが迎えに来て送って来てくれる、と言われ何だかうれしいようなほっとしたような気持ちがしました。退院しても私が教会に行くことは反対されましたが、息子からいつも「ママ教会に行こう」と言われるので、私も家族に迷惑をかけないように掃除洗濯や片付けをきちんと済ませて出かけるようにしていました。

それから2年目、やっと主人からバプテスマを認めてもらいました。1969年7月25日でした。そのころになってようやく少しずつ理解することができるようになり、小さな証を得られるようになりました。現世の苦難や悩みを受け入れ耐えていくことができるよう、主は見守ってくださっている、だからキリストの福音を受け入れてバプテスマを受け、み言葉を真実としてそれを信じるのが信仰であり、喜びでもありました。バプテスマも娘や息子に助けられて決心できました。私ひとりではとてもここまでは力が及びませんで

した。息子もバプテスマを受けて、神権をいただきました。普通の人よりも遅れている子を普通の人と同じように扱ってくださり、息子もそれにこたえるように努力していました。

私たちはこのようにして教会に集うことで多くを学び、少しずつですが成長し、温かい気持ちを感じてきました。助けてくださった会員の方々に本当に感謝しています。娘も恵まれて帰還宣教師の兄弟と結婚し、ふたりの娘に恵まれて幸せな家庭生活を送っています。引っ越しして教会が遠くなると思った時もありましたが、近くにまた教会ができ、おかげで今では主人も「早く行かないと遅れるぞ」と言ってくれるようになり、心から感謝しています。息子も9年前からまた別の試練の毎日が続いていますが、そんな時いつも多くの兄弟姉妹の愛と助けと祈りをいただけてきました。天のお父様はその祈りにこたえてくださり、何度も危ういところを助けられました。息子の腎不全じんふぜんはこれからも続き、合併症などでも苦しむこともあるかもしれませんが、信仰は彼に忍耐力を教えて、希望を与えてくれています。

アルマ書第36章3節には「すべて神に頼る者は、苦しみ悩み禍に逢う時に助けられてこれを忍ぶことができ、また終りの日に高く上げられる」とあります。大変な試練は私たち親子にまだ続くかもしれませんが、聖書にも「すべて[主]を信じる者は、失望に終ることがない」(ローマ10:11)とあります。神様は息子をとても愛してくださっているように思えます。信仰をいただいたことを心から感謝いたします。新しい教会堂は愛する人たちと共に集う、主に献堂された建物です。終わりの日まで変わることなく続けていきたいと思っています。「聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている……。」(ローマ5:3-5)いつもお父様の愛に対する感謝を忘れずに愛する兄弟姉妹と共に学び、喜びを分かち合っていきたいと思っています。(ささき・なつえ 支部扶助協会教育担当副会長)

新教会堂の 紹介

鉄骨造 2階建
 建築面積：191.15㎡
 延床面積：365.26㎡
 敷地面積：347.116㎡
 所在地：大阪府大阪市城東区関
 目1-24-14
 ☎06-933-9540



- ステークキ部長：木村研一郎
- 京都南ステークキ部城陽ワード部
監督：長嶋晃
 - 京都南ステークキ部六地藏ワード部
監督：桑田猪之吉
 - 京都南ステークキ部洛南ワード部
監督：中村信臣
 - 京都南ステークキ部洛南中央ワード部
監督：長谷川幸泰
 - 京都南ステークキ部山科ワード部
監督：松井善昭
 - 京都南ステークキ部大津ワード部
監督：梅本真一
 - 京都南ステークキ部草津ワード部
監督：坂口浩一
 - 京都南ステークキ部彦根ワード部
監督：小菅篤史

お知らせ

ローカル

役員の内命

1992年5月16日から6月18日までに管
 理本部会員統計記録課に通知のあった
 役員の内命(敬称略)

- 札幌ステークキ部旭川第2ワード部
新監督：遊佐春男
(前任者：岡村雅博)
- 札幌ステークキ部白石ワード部
新監督：長谷川敬史
(前任者：岩田誠司)
- 札幌西ステークキ部室蘭ワード部
新監督：米沢忠義
(前任者：川上輝男)
- 大阪伝道部田辺支部
新支部長：Kevin Lee Hammersley
(前任者：榎本雅友)
- 福岡伝道部鹿児島地方部宮崎支部
新支部長：Dennis Curt Petersen
(前任者：北川國治)

名称変更

- 札幌西ステークキ部篠路支部
(大通り支部より名称変更)
新支部長：岡村雅博
(前任者：北山嘉朗)

新ユニット

去る5月31日、大阪北ステークキ部は、
 京都北ステークキ部、京都南ステークキ部、
 大阪北ステークキ部、大阪東ステークキ部
 に分割された。それぞれのステークキ部
 に所属するユニットは以下のとおりで
 ある。

- 京都北ステークキ部
ステークキ部長：福山克一郎
- 京都北ステークキ部岩倉ワード部
監督：山本龍夫
- 京都北ステークキ部下鴨ワード部
監督：堤善昭
- 京都北ステークキ部洛北ワード部
監督：竹下心也
- 京都北ステークキ部洛中ワード部
監督：佐藤公治
- 京都北ステークキ部洛西ワード部
監督：加藤節夫
- 京都南ステークキ部
- 大阪東ステークキ部
ステークキ部長：田中良一
- 大阪東ステークキ部高槻第1ワード部
監督：杉本直明
- 大阪東ステークキ部高槻第2ワード部
監督：福田和彦
- 大阪東ステークキ部茨木第1ワード部
監督：岩本正憲
- 大阪東ステークキ部茨木第2ワード部
監督：津田信男
- 大阪東ステークキ部吹田ワード部
監督：敷内茂樹
- 大阪東ステークキ部摂津ワード部
監督：渡辺章雅
- 大阪北ステークキ部
ステークキ部長：牧瀬十二郎
- 大阪北ステークキ部川西第1ワード部
監督：赤間洋
- 大阪北ステークキ部川西第2ワード部
監督：岩木正篤
- 大阪北ステークキ部池田ワード部
監督：菅原政義
- 大阪北ステークキ部箕面ワード部
監督：岩田雅方
- 大阪北ステークキ部千里中央ワード部
監督：辻野茂樹
- 大阪北ステークキ部豊中第1ワード部
監督：横尾清一
- 大阪北ステークキ部豊中第2ワード部
監督：小山達生
- 大阪北ステークキ部豊中第3ワード部
監督：風呂井幸三

6月に召された専任宣教師

第156期生18人



後列左から1-10, 前列左から11-18

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 山口めぐみ	名古屋S/名東北W	仙台伝道部
2. 三條みどり	町田S/湘南W	福岡伝道部
3. 神成陽子	東京東S/鎌ヶ谷W	神戸伝道部
4. 岡本理加	東京東S/鎌ヶ谷W	東京南伝道部
5. 伊藤真由美	岡山S/福山B	東京南伝道部
6. 四元順子	鹿児島D/鹿児島B	札幌伝道部
7. 中川由美	福岡S/福岡W	札幌伝道部
8. 江崎誠	町田S/町田第1W	大阪伝道部
9. 長濱創	横浜S/大船W	神戸伝道部
10. 内田征児	岡山S/松江W	札幌伝道部
11. 棚原千恵子	沖縄M/宮古B	神戸伝道部
12. 笠原里香	東京西S/府中W	岡山伝道部
13. 國仲トモ子	沖縄那覇S/首里W	福岡伝道部
14. 新美三智美	名古屋S/刈谷W	福岡伝道部
15. 新垣麻衣子	沖縄那覇S/首里W	大阪伝道部
16. 門脇卓也	東京西S/府中W	大阪伝道部
17. 藤田貴	青森D/弘前B	東京北伝道部
18. 鈴木壮一郎	町田S/湘南W	札幌伝道部

S：ステーキ部，M：伝道部，D：地方部，W：ワード部，B：支部

新刊ビデオの
お知らせ

●放蕩の果てに——憐れみと悔い改め、
愛と希望の物語

VHS ビデオカセット

ITEM 53061 300 30分 1,200円

彼は過ちを犯した。それも重大な過ちである。父親を深く悲しませ、兄の怒りを買った。

やがて変化が訪れる。何カ月も更生施設で過ごした彼の帰宅を、家族の誰もが胸を弾ませて待っていた。ただ、兄だけは別だった。兄は誇りと憤りをぬぐいきれなかった。放蕩に身を持ち崩した弟の改心を信じられなかったのだ。

家族は再びぎずなを取り戻せたかのようであった。しかしその安らぎへの願いは、兄の弟へのわだかまりによって、今にも崩れそうになる。

この現代版放蕩息子の物語には、誤った選択が自らの身に招く不幸な結果、そして救い主とその教えに従う謙遜な人に与えられる良き報いが描かれている。

